

研究紀要

第20号

- 土器類の産地推定についての基礎的検討 大屋道則
- 方形周溝墓と土器Ⅲ 福田 聖
- 東国の古墳時代中期土器と韓半島系土器 坂野和信
- 官衙の門、居宅の門 田中広明
- 埋蔵文化財データベースの作成について 大屋道則 新屋雅明 橋本 勉
- 収蔵石製品の鈹物名の同定(1) 清水慎也 大屋道則

2005

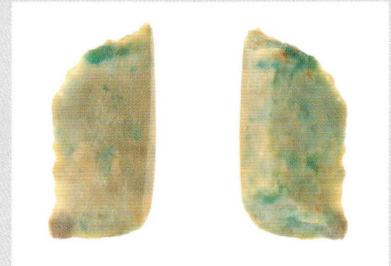
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1-5-muscovite ×1.5



2-10-muscovite



3-16-quartz・muscovite



4-9-quartz・pyrophyllite



5-12-pyrophyllite ×1.5



8-15-pyrophyllite



6-27-pyrophyllite ×1.5



7-11-pyrophyllite ×1.5



9-25-talc



10-28-talc



15-21-talc



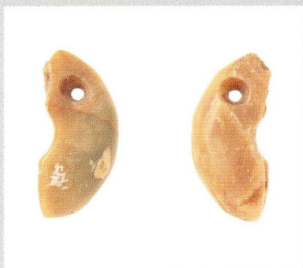
11-3-talc



12-4-talc



16-13-talc



13-1-talc



14-14-talc



17-2-talc



18-26-actinolite



19-23-antigorite



20-22-clinocllore



21-17-jadeite



27-8-jadeite



22-6-jadeite

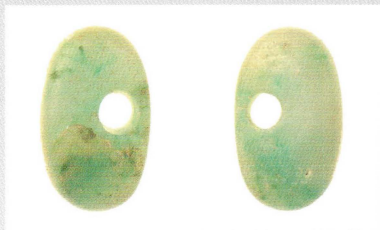
×1.5



23-19-jadeite



24-20-jadeite



25-18-jadeite



26-24-jadeite



28-7-jadeite

目 次

口絵

序

〔論文〕

土器類の産地推定についての基礎的検討

—理論的背景の整備と研究史的課題の明確化—

..... 大屋 道則 (1)

方形周溝墓と土器Ⅲ —概観 その2— 福田 聖 (57)

東国の古墳時代中期土器と韓半島系土器

—地域社会の形成と韓半島系土器群の系譜— 坂野 和信 (77)

官衙の門、居宅の門 田中 広明 (103)

埋蔵文化財データベースの作成について

—遺物属性とカラー画像についての大規模データベース作成の実務—

..... 大屋道則 新屋雅明 橋本 勉 (115)

収蔵石製品の鉍物名の同定 (1)

—平行ビーム法を利用したX線回折による非破壊での鉍物の同定—

..... 清水慎也 大屋道則 (131)

東国の古墳時代中期土器と韓半島系土器

—地域社会の形成と韓半島系土器群の系譜—

坂野和信

要旨 東国・南陸奥の韓半島系模倣土器は、大きく内陸部の利根川上流域と古東山道ルートに沿った地域及び、東京湾岸地域と太平洋海岸沿いの海浜地域に分布していることから、各グループにおける韓半島系土器の概ねの傾向と特徴を示した。模倣土器が認められる地域には5から8のグループに分かれ、韓半島南部の東西における加耶と馬韓及び、一部百済、新羅の4つの系統・系譜が認められた。主体となる加耶・馬韓2つの系譜は相互に重なって入り組んでおり、移住民との交流は日常生活レベルで行われていた。模倣土器の系譜の繋がりからは、移住民のネットワークが形成された可能性が導かれた。また、交通路の結節点には韓半島系土器が集中する傾向がみられ、地域首長墓には格子叩技法の埴輪が韓半島先進技術導入のシンボルとして供献された。この事例から地域首長墓の造営と地域社会との関係について、共同体事業とその記念物という視点から知見を述べる。

はじめに

関東・南東北地域でみられる韓半島系土器群の多くは、朝鮮三国時代土器の製作技法が伴わない形態模倣である。陶質土器を含めて韓半島からの搬入土器は、限定されていることが東国・南陸奥における特徴とみられる。その反面、畿内社会では定着しなかった軟質土器模倣の平底坏・平底碗等の平底食器が関東・南東北地域には定着した。

関東地域とその外縁部に位置する南東北地域の韓半島系軟質土器は、その多くが見過ごされていた。韓半島の日常生活用具である軟質模倣土器の平底鉢・平底深鉢等を抽出して、和泉式土器や南小泉式土器との共伴関係を中心に、主な土器群の系統・系譜を述べてみたい。これらの地域で主体となる韓半島系土器は、基本的に軟質土器の形態を模倣した模倣土器である。韓半島における一定の地域との交流関係を示す資料は乏しく、韓半島と比較して各地域による系統・系譜の差異を導き出すことはかなり難しい。

一方、韓国では平底深鉢は三国時代の一般的煮沸

具であり、その器形のみでの差異から系譜を求めることは難しいが、ごく一般的な生活用具であるが故に、地域社会の中で潜在的な渡来系移住民の生活様式を受容した地域の姿が浮かび上がると考えられる。

東国・南陸奥の軟質系模倣土器は、大きく内陸部の利根川上流域と古東山道ルートに沿った地域及び、東京湾岸地域と太平洋海岸沿いの海浜地域に分布している。これは同時に、模倣土器というフィルターを通してみているが、大要として韓半島系土器の系譜を表す地域的グループとみることができるであろう。陸路・河川・海路という交通路が重要な要素となっている。陸路と河川、海路と河川が重層する多重構造交通路の結節点の形成が、古墳時代中期の地域社会の形成と韓半島系土器のあり方を示していると考えられる。

今回は各グループにおける韓半島系模倣土器の概ねの傾向と特徴を示すが、その土器の系譜の繋がりからは、移住民に拠るネットワークが形成された可能性が導かれた。また、交通の結節点には韓半島系模倣土器が集中する傾向がみられる。その社会的背

景については別の機会に譲りたい。

本稿の韓半島系模倣土器とは、多くの場合、土器の製作技法は伴わないが、陶質土器、軟質土器の特徴を表す土師器で、韓半島起源の土器に系譜が求められるものである。東国・南陸奥では地域的要素も重なって複雑であるが、韓半島系生活様式の受容を表す1つの指標としてみる事ができる土器群である。その総称として韓半島系土器と呼称する。

I 韓半島系土器の分布と地域分類

1990年以降、韓国の国内においても本格的に三国時代の「倭系遺物」「土師器系軟質土器」等、日本列島に起源をもつ遺物の輸入について着目され始めた。特に「倭系遺物」への関心は、金海大成洞古墳群の発掘調査(1990~91年)に拠って、従来「倭系遺物」とされてきた巴形銅器・筒型銅器等が大量に出土し、本来的に韓半島系譜であるという韓国考古学会からの反論が決定的な引き金となった。

韓国で「土師器系軟質土器」は、土師器の製作技法を伴う「忠実形」と土師器の一部の特徴が嶺南地域(新羅と加耶両地域)の赤褐色軟質土器と類似する「折衷形」に分類された(註1)。そして、5世紀初頭における倭への洛東江下流域の加耶諸国から陶質土器生産技術の移転に表徴される先進諸技術の移転及び、倭の韓半島系統・系譜の文化的受容という歴史的脈絡の中で、韓半島の「倭系遺物」と列島の韓半島系模倣土器が位置づけられる。

これまでに発表した論文(註2)で関東地域を取り扱う場合には、和泉式・南小泉式土器に伴う韓式系土器(韓半島系土器)として、坏・椀類、平底鉢の食器と平底深鉢や甕・甌等の煮沸具を中心に述べてきた。今回は韓半島系土器群の各グループにおける系譜の傾向を把握するために、改めて韓半島系平底鉢・平底深鉢や甌・壺類を取り上げ関東・南東北

地域の韓半島系土器群の実態と、その系譜の把握を中心にみて行くことにしたい。関東・南東北地域の韓半島系食器と大和・河内の食器系譜については、「畿内と東国の古墳中期における韓半島系食器」(註3)を参照して頂きたい。

韓半島南部の地域については、『三国史記』『三国遺事』等の文献資料から、西側の「馬韓」と東側の「金官」に分けられるが、本稿で加耶と呼称した場合には洛東江下流域の金海・釜山地域として、狭義の「加耶」に限定した。また、加耶系また加耶地域は広義の「加耶諸国」を表す意味で用いた。馬韓については『三国史記』における4世紀中頃の「馬韓滅亡記事」による馬韓滅亡説は、考古資料からこれを否定する立場である。

さて、東国・南陸奥の韓半島系土器が出土した遺跡は、和泉式と鬼高式成立期の土器を含めると60箇所近い遺跡を確認できるが、今回は主として、和泉式土器と共伴関係をもつ44箇所の遺跡を取り上げて、表と分布図(第1図)にまとめた(表と分布図の番号は一致する)。その分布は大きく2つの地域に分けることができる。第一は、内陸部の利根川上流域と古東山道ルートに沿った地域、第二は、東京湾岸地域と太平洋海岸沿いの海岸地域であり、大きく2つの地域に分けてみる事ができる。関東・南東北地域を2つに分けた地域はさらに、まとまりをもつ小グループに分けられる。

1 関東・南東北の内陸部グループ

韓半島系土器が利根川上流域に集中する地域(第1図1~17)は、利根川上流域北側(1~9)と、その南側に位置する(第1図10~16)南北2つのグループに分けてみる事ができる。北側のグループは、利根川上流部(第1図1)とその東側の荒砥川流域(第1図2・3)及び、西側の井野川・烏川流域(第1図4~9)のグループである。利根川南側

のグループは、女堀川・小山川流域（第1図10～16）に展開する一群である。利根川の北側で西に位置する（17）等は独立的存在があるが、太田天神山古墳に近い遺跡である。上記した2つのグループは、利根川を軸にまとまりをもつことから、大きく1つのグループとして把握することもできる。しかし、韓半島系土器の特色のわずかな相異から、南北2つに分けて利根川上流域北側グループ（略称・利根川北グループ）と利根川上流域南側グループ（略称・利根川南グループ）と呼称することにする。

利根川北グループの空沢遺跡（第1図1）では搬入品の平底鉢及び、烏川流域の剣崎長瀬西遺跡（第1図6）では、格子叩技法の甑や馬の埋葬、馬具等が認められる。両遺跡では積石等、渡来系移住民が生活した直接的痕跡がみられることが大きな特徴である。また、利根川南グループが集中する女堀川・小山川流域では、金鑽神社古墳等3基の60から70m級の大型円墳（第1図12・13・16）に格子叩技法の円筒埴輪が巡らされている。このように利根川南・北グループは、関東・南東北地域の中で最も韓半島系譜が鮮明に浮かび上がる地域である。以下に述べるように、この地域と古東山道ルートで結ばれさらに、西から北東に展開する渡良瀬川グループと鬼怒川・小貝川グループ及び、阿武隈川グループの3グループが認められる。

南北に河道が形成される地理的特徴をもつ地域に分布するグループである渡良瀬川流域グループ（第1図34・35）と、東側の鬼怒川・小貝川流域グループ（第1図36～38）の2つである。渡良瀬川グループの中にも白山台遺跡（第1図35）からは、陶質土器の平底甗、鬼怒川・小貝川グループの殿山遺跡（第1図37）からも陶質土器の平底甗等が出土している（渡良瀬川グループ、鬼怒川・小貝川グループと略称する）。

第3グループもやはり南北に河道が形成された阿武隈川流域に展開する中通り地域で、韓半島系土器が出土した遺跡（第1図39～42）である。このグループ上流部の三森遺跡（39）では陶質土器小型平底碗、中流部に位置する郡山盆地の南山田遺跡（41）からは、陶質系の把手付小型壺が出土している。下流域の下入ノ内遺跡（42）では内湾平底杯が認められる。これら3つの地域には3つのグループが存在したと考えられるが、現状ではまとめて阿武隈川流域グループと呼称することにする（阿武隈川グループと略称する）。

このように関東・南東北内陸部では、①利根川北・南グループと②渡瀬川グループ・鬼怒川・小貝川グループ及び、③阿武隈川流域グループの大きく3つのグループに分けて把握できる地域が形成されたとみられる。

2 関東・南東北海岸部グループ

東京湾岸地域には、韓半島系土器がまとまって分布（第1図21～28）しているが、何れも東京湾岸沿いに河川を若干遡って内陸に入った地域であり、東京湾グループと呼称する。西側は鶴見川流域（第1図23）、多摩川流域（第1図22）、旧入間川流域（第1図21）、東側は東京湾の内房に展開する一群（第1図25～28）のまとまりである。この東京湾グループで旧入間川下流域の伊興遺跡（第1図21）からは、縄文陶質土器丸底甗が出土し、その上流に位置する白楯殿ノ前遺跡（第1図20）では、揺籃期の陶質系須恵器の樽形甗と無蓋高坏がみられる。また、水系の異なる東京湾から元荒川を遡った上流部の武良内遺跡（第1図19）では、牛角把手付甗等が認められる。また、内房の大森第2遺跡（第1図24）では、百済系格子叩技法の軟質土器平底杯と平底深鉢が出土している。これらの韓半島系土器出土遺跡の分布から、東京湾グループとしてまとまりをもつ地域と

みることができる。第1図19・20は河川交通の中継基地であるため除く。

東京湾グループの北東で当時、内海であった古香取海西部にも韓半島系土器が出土する遺跡（第1図29～31）が点在していることから、1つのグループとしてみることができる。このグループを内海であった古香取海グループと呼称することにする。この地域は櫻川によって鬼怒川・小貝川グループと河川で繋がっており、平台遺跡（第1図29）では平底深鉢が出土している。

太平洋海岸地域の久慈川下流域（第1図32・33）と夏井川下流域（第1図43）及び、請戸川下流域（第1図44）は、海路によってそれぞれの拠点に韓半島系土器が出土する遺跡が展開しており、太平洋海岸グループとして捉えることができる。この海岸グループ南側の久慈川下流域には90m級の大型前方後円墳、権現山古墳（第1図33）が存し、格子叩技法の円筒埴輪が出土している。海岸グループ北側の夏井川下流域の龍門寺遺跡（第1図43）では、軟質土器模倣の平底碗と平底鉢、また、請戸川下流域の鹿屋敷遺跡（第1図44）からは、模倣平底鉢が出土している。南の久慈川下流域グループと北の夏井川下流域・請戸川下流域グループ（略称、久慈川グループ・夏井川・請戸川グループ）と呼称する。

Ⅱ 韓半島系内陸部グループの形成とその系譜

1 利根川上流域北グループの形成

群馬県と埼玉県北部地域の韓半島系土器は、特に軟質系土器について着目した論文が1980年代から90年代の初めに認められる。今回取り上げた韓半島系模倣土器は、これらの論文で既に一定の評価を示したが、さらに資料を加え整理して内容を深めたい（註4）。したがって、箇々の資料についてどの論文で何時発表したという説明は省略する。近年では、

剣崎長瀬西遺跡の発掘調査（註5）によって、韓半島系土器や馬具・馬葬坑、方形・円形積石塚等、渡来系移住民の顕著な痕跡が検出され新たな展開をみることができる。

1.1 平底鉢と平底深鉢

はじめに述べたとおり、平底深鉢は三国時代においても韓国では一般的煮沸具であり、小型の平底鉢は食器の一部として使用されている。それらの形態模倣から系譜を求めることは難しい。しかし先に述べたとおり、ごく一般的な生活用具であるが故に、地域社会の中で潜在的な移住民の生活様式を受容した地域で彼らの姿がみえると考えられる（註6）。

利根川北グループには、他のグループと比較して平底鉢・平底深鉢が出土する遺跡が多く、和泉式に限ってみても両者を併せると5遺跡（第1図1～4・9）が認められる。そして関東で最も典型的な平底鉢は、既に指摘したが、利根川北グループの中でも最奥部に位置する（第1図1）空沢遺跡35号墳出土の平底鉢（第2図1）を挙げることができる。この平底鉢は和泉式成立期の布留式「柱状屈折脚高坏」（第2図2）と共伴関係がある。平底鉢は軟質の轆轤挽き成形であり、国内では大庭寺1-OL土器溜まり下層出土（註7）と比較できるが、この類例は口縁部の外反が大きく、空沢遺跡35号墳の平底鉢（第2図1）とは系譜が異なる。

利根川北グループの平底深鉢で注目されるものは、次の2遺跡に認められる。熊野堂遺跡（第1図4）の平底深鉢（第2図7）、温井遺跡（第1図9）の平底深鉢（第2図9）である。熊野堂遺跡の平底深鉢（第2図7）は、法量が大きい割に器壁が薄く、胴部が張り出して口縁部が短く外傾する器形の特徴が認められる。加耶地域にみられる平底鉢・平底深鉢は、口縁部が短くその外傾も弱い。また、成形技法の特徴は指圧痕や轆轤回転ナデを伴う製作技法が

多く認められ、その底部側面には、円盤技法の底部と胴部外面との接合部を調整する縦方向のヘラ削りが施されることが一般的である。

平底深鉢で格子叩や平行叩を施さないタイプは、4世紀前半から伝統的に洛東江下流域に多く認められるタイプで、指圧痕や轆轤回転ナデを伴う製作技法は、広く嶺南地域にみることができると考えられる。熊野堂遺跡の平底深鉢（第2図7）は、器形と技法の特徴から、加耶地域に系譜を求めると考えられる。温井遺跡の平底深鉢（第2図9）は、平行叩が施されるもので軟質系平底鉢とみられるものである。

荒砥北三木堂遺跡（第1図2）では、平底鉢と甕の形態模倣土器（第2図3・4）と須恵器無蓋高坏（第2図5）が組み合って、セットとして同じ住居跡から検出されていることが注目される。この住居跡に竈は伴わない。無蓋高坏（第2図5）はTK73号窯式（註8）併行期である。また、柳久保遺跡（第1図3）からは模倣平底鉢（第2図6）が出土している。この遺跡では平底鉢以外にも馬韓系の内湾平底坏等の軟質模倣土器が認められる。

和泉式土器との共伴関係をみると、熊野堂遺跡の軟質系平底深鉢（第2図7）は、和泉式高坏（第2図8）と同一住居跡から出土している。この高坏の特徴は、口縁端部と脚部端部を小さく巻き込む技法的特徴をもつタイプであり、大和の布留式Ⅱ期新相から布留式Ⅲ期古相（註9）に位置づけられる高坏の技法と共通点が認められるものである。また、和泉式成立期の特徴である柱状で裾部が屈折する布留式系高坏、所謂「柱状屈折脚高坏」で、坏部と脚部に細かい縦ヘラ磨きが施されている。

即ち、和泉式成立期とみられるタイプであり、国内の出土例から軟質系平底深鉢（第2図7）の時期を推定することができる。温井遺跡の軟質系平底深

鉢（第2図9）は、高坏（第2図10）、小型壺（第2図11）と同一住居跡から出土している。先に述べた空沢遺跡35号墳出土の和泉式高坏（第2図2）も、熊野堂遺跡の高坏（第2図8）も同様の技法をもつタイプである。

このように利根川北グループの空沢遺跡35号墳出土の軟質系平底鉢（第2図1）及び、熊野堂遺跡の軟質系平底深鉢（第2図7）は、和泉式成立期に伴う韓半島系土器とみることができると考えられる。荒砥北三木堂遺跡の平底鉢（第2図3）は、須恵器無蓋高坏との共判関係から和泉式Ⅰ期新相、温井遺跡の軟質系平底鉢（第2図7）は、和泉式Ⅰ期新相の高坏からみればこの時期となるが、底部付近の破片であり時期的に遡る可能性がある。

利根川北グループへの軟質系平底鉢・軟質系平底深鉢の導入段階は、和泉式成立期と同時であり、韓半島系移住民の居住もこの時期には始められていたと考えられる。

1.2 格子叩の壺と甕、平行叩の長胴甕

利根川北グループからは、韓半島技法で造られた格子叩技法の壺（第3図14）と長胴甕（第3図15）及び、平行叩の丸底甕（第3図16）等を抽出することができる。このうち格子叩技法の「壺」（第3図14）は、口縁端部が須恵器甕のように肥厚するタイプである。下芝五反田遺跡（第1図5）から出土した土師器壺で、体部全面に格子叩が施され韓半島技法で造られた壺とみることが一般的であるが、倭・韓折衷技法タイプとみられる。

一方、剣崎長瀨西遺跡（第1図6）出土の甕（第3図15）は、格子叩技法の手順まで韓半島南部と同じ技法であり、底部周縁に沿って小円孔が多数配置されるタイプである。甕の牛角把手（第3図17）にも切り込みが確認できる。関東地域では切り込みを入れる例の方がはるかに少ない。平行叩技法の丸底

甕（第3図16）も同系の製作技法である。小破片の甕等（第3図18）にも格子叩技法が明瞭にみられる。上記した土器の製作技法の系譜とこの遺跡から出土した馬具の系譜（阿羅加耶）とも矛盾がない。特に、幼年馬と老年馬の埋葬が認められ、幼年馬には初期須恵器甕が伴っていたとされる。馬の飼育が行われていたことが重要である。また、この遺跡では和泉式Ⅱ期古相に位置づけられる坏、椀、高坏、壺、甕等が多量に認められる。

このように剣崎長瀨西遺跡における土器造りには、韓半島移住民の生活様式が直接反映され、彼らの役割の一端として当時の社会において貴重な馬の飼育という重要な役割を果たした一世の姿があった。即ち、剣崎長瀨西遺跡の韓半島系移住民の出自は、洛東江下流域西側の加耶地域が1つの可能性として導かれる。

2 利根川上流域南グループの形成

2.1 平底鉢と平底深鉢の系譜

利根川南グループでは平底鉢はみられるが平底深鉢は少なく、現状で韓半島系統の製作技法を伴うものは認められない。後張C遺跡（第1図10A）からは平底鉢（第2図12）、後張遺跡（第1図10B）には平底鉢（第2図13）がみられる。延享割遺跡（第1図17）の平底深鉢（第2図14）は、深鉢として法量の小さいタイプである。

後張C遺跡平底坏（第2図12）は、器壁が薄く器形の特徴から金海・釜山地域等に類似例をみることができ、体部にヘラ削りが施され韓半島の製作技法は伝えられていない。和泉式成立期Ⅰ期古相の土師器と相伴している。後張遺跡の模倣平底鉢（第2図13）は、柳久保遺跡の軟質模倣平底鉢（第2図6）と類似するタイプで、両者とも口縁部が小さく外反し、体部が湾曲して張り出すタイプである。相伴する和泉式土器は共にⅠ期新相である。この口縁

部が小さく外反し、体部が湾曲して張り出す特徴をもつタイプは、金海・釜山の加耶に多くみられる平底鉢であることが指摘できる。

延享割遺跡（第1図17）から出土した軟質模倣平底深鉢（第2図14）は、法量の小さいタイプであり、韓半島南部では、熊野堂遺跡の法量の大きい軟質系平底深鉢（第2図7）と、法量の小さい平底深鉢の2つのタイプがセットで認められる。このセット関係は国内の大庭寺遺跡で出土しているが、関東地域では大小2つのタイプがセットで出土した例は、現在確認できない。延享割遺跡からは、陶質系須恵器の有蓋高坏蓋（第2図15）がみられ、櫛歯列点文を放射状に二段加える装飾が施されている。この高坏蓋と初期須恵器甕（第2図16）及び、和泉式高坏（第2図17）が同一住居跡から出土している。須恵器甕（第2図16）は、胴部中央に振幅の細かい波状文がみられるもので、陶邑窯TK73号窯式平行期であり、和泉式高坏（第2図17）はⅠ期新相であることから両者の時期は一致する。しかし、陶質系須恵器の有蓋高坏蓋（第2図15）は、揺籃期の陶質系須恵器でありTK73号窯式併行の甕より遡る土器型式である。

2.2 棒状把手と牛角把手付甕の系譜

利根川南グループには棒状把手付甕と牛角把手付甕の2タイプの甕が認められる。棒状把手付甕（第2図18）は、平塚遺跡（第1図11）に認められ、身の深い内湾平底坏（第2図19）もみられる。古川端遺跡（第1図15）の短い棒状把手付甕（第2図20）の蒸気孔は1+5であり、内湾平底杯と共に出土している。また、牛角把手付甕（第2図21）蒸気孔1+6が、利根川南グループより東側に寄って元荒川上流部に位置する武良内遺跡（第1図19）に認められる。両者の蒸気孔の配置と数は、羅州地域の甕と類似しているが、後者の把手は牛角状（第2図21）

であり、馬韓系と加耶系が混在する折衷的模倣が認められる。

棒状把手付甑（第2図18）と身の深い内湾平底坏（第2図19）は同じ系譜とみられ、特に棒状把手付甑は、原三国時代の3世紀後半から4世紀初め、日本の古墳時代成立期から栄山江下流域の靈岩・羅州地域にみられる特徴的甑である。さらに棒状把手付甑の系譜は、寶城江流域にみられ5世紀にも継承されていることが明らかである。

一方、牛角把手付甑（第2図21）は、洛東江下流域の特徴的甑である。近年の発掘調査（註10）では、栄山江下流域の5世紀後半の古墳からも牛角把手付甑が出土していることから、韓国内での東西交流関係も考慮しなければならない。この影響は、5世紀後半には羅州地域の棒状把手に浅く切り込みが加えられ、加耶系の影響を受けたことが認められる。基本的には、5世紀後半においても棒状把手付甑は栄山江下流域、寶城江下流域の甑の系譜とみることができる。

即ち、利根川南グループでは、和泉式成立期後半の5世紀前葉段階において加耶地域だけでなく、馬韓地域に出自をもつ人々との交流関係があったことが指摘できる。このことは和泉式Ⅱ期古相の古川端遺跡（第1図15）から出土した、靈岩・羅州地域の特徴的土器である内湾平底坏（註11）の底部に「コの字状」の杵痕（ゲタ痕）を伴うことから理解できる。

2.3 蓋の模倣と系譜

利根川南グループの諏訪遺跡（第1図14）の有蓋高坏蓋を模倣した蓋（第2図22・23）は、同じ住居跡から出土した須恵器無蓋高坏と共伴しており、須恵器高坏は陶邑窯ON46号窯式とみられる。この時期の金海・釜山地域は新羅の領有化が行われ、新羅の陶質土器の影響を強く受けた土器型式が盛行した

時期である。模倣蓋（第2図22・23）は新羅系陶質高坏の蓋を模倣したものであろう。

利根川南グループからは、鬼高式成立期の短頸壺の鈕付蓋（第3図9）を抽出することができる。城北遺跡（第1図18）出土（註12）の土師器模倣蓋である。須恵器模倣坏（第3図10）と同じ住居跡から出土し共伴関係が認められるものである。この類似例として、慶尚南道峽川郡玉田古墳群M3号古墳（註13）出土の短頸壺鈕付蓋（第3図12）を挙げることが一般的である。この地域にみられる蓋の鈕は高く太くヘラ削りが施され、断面形が丸いことが特徴である。城北遺跡の鈕付蓋の鈕（第3図9）は、逆に低くて細く断面形も薄く板状であり全体に扁平に造られている。

一方、全羅南道の羅州郡新村里第9号墳乙甕棺墓（註14）出土の短頸壺鈕付蓋（第3図13）は、鈕は高いが断面形は板状であり、蓋の造りが全体に扁平であることが特徴で、5世紀後葉とみられる。即ち、城北遺跡の鈕付蓋（第3図9）は既に形骸化しているが、韓半島南部の東西両地域の系譜に関わり、韓半島東側に限られた系譜ではないことを指摘できる。

2.4 格子叩技法の埴輪

利根川南グループの女堀川・小山川流域には、3基の60mから70m級の大型円墳が造営されているが、何れも格子叩技法の円筒埴輪が巡らされている。格子叩技法が最も明瞭な円筒埴輪は、金鑽神社古墳（第2図24）、生野山古墳（第2図25）の格子叩であり、緻密で移住民一世が製作した韓半島軟質土器の格子叩技法（第3図15・18）に近似する。両者は突帯も凸状を呈している。公卿塚古墳の格子叩は浅くて格子目が大きく粗いことから、在地的技法が加えられたものである。このように在地首長層の古墳に韓半島系格子叩技法の埴輪が認められる。地域社会

と在地首長層及び、韓半島系技法の導入と地域首長の古墳造営との関係については、Ⅵ節でまとめて述べることにする。

3 渡良瀬川と鬼怒川・小貝川グループの形成

利根川南グループの東に古東山道ルートに沿って、韓半島系土器が出土する最西端の遺跡は、渡良瀬川下流域の赤羽根遺跡（第1図34）と白山台遺跡（第1図35）である。

渡良瀬川グループの赤羽根遺跡では、加耶系平底碗が出土している。白山台遺跡からは、平底甗（第4図20）が出土していることが知られている。鬼怒川流域の二ノ谷遺跡（第1図36）からは、陶質系須恵器蓋（第4図21）、殿山遺跡では陶質小型平底壺（第4図22）とミニチュア把手付蓋（第4図23）、小貝川流域の砂部遺跡では、把手付無蓋高坏（第4図29）と土師器模倣の平底坏・平底鉢（第4図30）が出土している。

着目される点は、①陶質平底甗が白山台遺跡と小型平底壺が殿山遺跡（第4図20・22）で2例認められること及び、②ミニチュア把手付蓋（第4図23）に伴って、③轆の羽口として再利用された和泉式成立期の高坏脚部（第4図24）が、殿山遺跡で同じ住居跡から出土していることである。

3.1 陶質平底甗の系譜

まず、渡良瀬川グループと鬼怒川・小貝川グループの平底甗の系譜についてみる。平底甗は全羅南道靈岩郡内洞里2号墳甗棺墓（註15）から出土した（第4図25）、同靈岩郡萬樹里4号墳1号土壙木槨墓（註16）出土の（第4図26）、同靈岩郡萬樹里2号墳1号甗棺墓（註17）出土例（第4図27）をあげることができる。このうち、内洞里2号墳甗棺墓の平底甗（第4図25）は、陶質土器で口縁部が内湾して拡がり頸部で絞られ、肩部に窪みが造られることが特徴である。この系譜を継承した平底甗が、萬樹

里4号墳1号土壙木槨墓の平底甗（第4図26）と考えられる。そして、第4図27の平底甗は、箱形の体部に多条の突線を巡らし、その上下と間に振幅の細かい波状文が丁寧に施されている。この他にも多種多様な甗が靈岩・羅州地域にみられることが特徴である。これらの甗・小型壺の基本的共通点は、底部が平底で肩部に突線を巡らすことである。平底甗は、韓半島南部西側の栄山江下流域の特徴的土器である。一方、加耶地域の咸安郡咸安道項里古墳群には小型平底壺が認められるが、突線は頸部に施される。また、馬山縣洞遺蹟には小形平底壺がみられ、頸部に突線を巡らす例もある。

国内で平底甗の系譜は、陶邑窯TG232号窯（註18）に存するが、実態として渡良瀬川・鬼怒川グループにみられる平底甗、小型平底壺の系譜を求めることはできない。渡良瀬川グループと鬼怒川グループの平底甗は、栄山江下流域の靈岩・羅州地域、また、小形平底壺は咸安郡から昌原郡地域に系譜を求めることができる。

3.2 鍛冶技術の系譜

次に、鬼怒川グループの殿山遺跡から出土したミニチュア把手付蓋（第4図23）及び、轆の羽口として再利用された高坏脚部（第4図24）は同一住居跡から出土したものである。言うに及ばず、轆の羽口は鍛冶用具の必需品である。把手付蓋の系譜が百済系であることは周知の事実であるが、馬韓の栄山江下流域から寶城江流域にも分布の広がりを見ることが出来る。和泉式高坏（第4図24）は、和泉式成立期I期の土器型式であり、上述した平底甗の系譜と併せてみれば、鬼怒川グループ殿山遺跡の鍛冶技術の系譜は、百済系か馬韓系である可能性を示している。

3.3 その他の系譜

殿山遺跡出土の把手付無蓋高坏（第4図28）の把

手は、太環で大きく杯部の下半に一对がみられる。この器形は本来的に金属器の系譜であり、洛東江下流域の陶質土器にモデルの系譜をみることができ。この把手付無蓋高坏は、和泉式Ⅱ期新相の土師器との相伴関係が認められるが、陶邑窯TK216型式以前の陶質系須恵器とみられる。ちなみに殿山遺跡では、炉を残しつつ竈が設置された住居跡が1軒検出され、相伴した和泉式土器から和泉式Ⅱ期古相であることを加える。

小貝川グループの砂部遺跡から出土した把手付無蓋高坏（第4図29）は、殿山遺跡（第4図28）と同じ系譜とみられ土器型式も類似する。また、和泉式Ⅱ期新相の平底鉢（第4図30）と内湾平底坏が同じ住居跡から出土している。

4 阿武隈川流域グループの形成

阿武隈川上流域で最南端に位置する三森遺跡（第1図39）からは、陶質土器の小型平底碗（第4図31）及び、轆の羽口に再利用された高坏脚部（第4図32）が同一住居跡（註19）から出土している。韓半島の陶質土器と鍛冶技術の導入について、鬼怒川グループ殿山遺跡の鍛冶技術の系譜が百済系か馬韓系の可能性があることを述べた。これに対して、阿武隈川流域グループ三森遺跡では、①加耶系の陶質小型平底碗（第4図31）と、同一タイプの陶質小型平底碗が土壌からも出土（第4図33）しており、加耶地域からの移住民との交流関係が想定される。しかし、三森遺跡の鍛冶技術が加耶系であることを否定することはできないが、陶質土器であり交易品としての入手も考慮しなければならないからである。

ちなみにこのグループの辰巳遺跡（第1図40）から出土した把手付短頸壺（第4図34）は、国内では類例を知らないが、胴部に施された多条の突線とその上下に振幅の細かい波状文を巡らす手法は、洛東江下流域西側の馬山・昌原地域の把手付の坏、また、

先に指摘したとおり馬韓系平底臚にも認められる施文手法である。馬山・昌原地域と靈岩・羅州地域の2つ地域をその出自の候補として挙げる事ができる。

阿武隈川中流域の郡山盆地グループの南山田遺跡（第1図41）からは、小型の把手付短頸壺（第4図35）が出土している。大庭寺遺跡の谷部393-OLに類例がみられ、洛東江下流の東西にも類似例が認められる。

阿武隈川下流域の入ノ内遺跡（第1図42）では、土師器模倣の馬韓系内湾平底坏と須恵器蓋を模倣した例がみられる。阿武隈川上・中流域では小型の陶質土器が出土する点が共通している。

Ⅲ 韓半島系海岸グループの形成とその系譜

南関東地域では韓半島系土器に着目して研究した論文は少ないが、その中で東日本の韓半島系土器に着目してまとめた論考（註20）には、千葉県での陶質土器の出土例がまとめて紹介されており参考にした。また、神奈川県と茨城県での軟質模倣土器の出土例は、これまで取り上げられたことはなかったが、軟質土器模倣の平底坏や平底鉢及び、陶質土器模倣の長頸壺が認められる。

1 東京湾グループの形成

1.1 平底鉢と平底深鉢

伊興遺跡（第1図21）からは、軟質模倣土器の平底深鉢（第2図30）と陶質土器高坏を土師器で模倣した高坏脚部（第2図31）等が出土している。この平底深鉢の器形は、熊野堂遺跡の平底深鉢（第2図7）に類似する。調整手法は、肩部と口縁部内面にハケ目調整、胴部外面は横ヘラ削りが施され在地的技法が加えられており、差異が認められる。また、器形には違いが認められるが、延享割遺跡の平底深鉢（第2図14）は、肩部の内外面にハケ目調整がみ

られる点が伊興遺跡（第2図30）と共通している。

東京湾グループの仏向町古墳周溝（第1図23）からは平底鉢（第2図32）が出土し、胴部外面にヘラ削りがみられる。この手法と同様に胴部外面にヘラ削りを施す平底鉢は、利根川南グループの後張C遺跡（第2図12）、同南グループの後張遺跡（第2図13）等に見ることができ。また、東京湾グループの草刈六之台遺跡（第1図28）から出土した平底鉢（第4図5）にも横ヘラ削りが施され、後張遺跡（第2図13）と器形も類似していることから、両者は同じ系統・系譜の軟質平底鉢がモデルになったと考えられる。このモデルの共通性は、同系統の移住民が関わったことに繋がる。

和泉式土器との相伴関係は、仏向町古墳出土の平底鉢（第2図32）と和泉式高坏（第2図33）が古墳の周溝跡から出土しており、高坏は和泉式I期新相である。また、草刈六之台遺跡出土の平底鉢（第4図5）は、和泉式III期の口縁端部が内傾する平底坏（第4図6）と同じ住居跡から出土しているが、平底鉢は時期が遡るものとみられる。おそらく東京湾グループの平底鉢と平底深鉢の系譜は、加耶地域に出自が求められものと考えられ、この系統・系譜は既に述べた、利根川南・北グループの平底鉢と平底深鉢のモデルの出自が加耶系であった点とも共通すると指摘することができる。

一方、大森第2遺跡（第1図27）からは、格子叩技法の平底鉢（第4図1）と和泉式小型壺、高坏（4図2・3、4）及び、平底坏が出土している。平底鉢と平底坏は何れも百済系で、和泉式土器からみればI期新相に位置づけることができる。加えて小加耶系の陶質高坏も認められる。

1.2 壺類の系譜

関東地域では従来認識されていなかった、和泉式土器と相伴関係が認められる陶質土器短頸壺を模倣

した2タイプの壺類を取り上げることができる。この①タイプ（第3図1-2）と②タイプの陶質土器模倣壺（第3図5）は、東京湾グループの遺跡から抽出することができる。

①のタイプは突線短頸壺であり、狛江市和泉遺跡（第1図22）と千葉市城の腰遺跡（第1図26）から出土している。②のタイプは鏝付二重口縁壺であり、船橋市法蓮寺山遺跡（第1図24）に見ることができ。

①の突線短頸壺（第3図1・2）は球胴形の胴部を呈し、外傾して拡がる口縁部に一条の突線を巡らす壺である。この特徴を示す突線短頸壺は、洛東江下流域に多く認められ、洛東江東側の釜山から西側の広い地域（加耶諸国）では、一般的に認められる陶質土器の短頸壺である。この地域の類似例として挙げた慶尚南道禮安里古墳群111号墳（註21）出土の突線短頸壺（第3図4）、同金海市徳亭遺跡12号墓（註22）から出土した突線短頸壺（第3図3）を挙げる。両者には時期差があり、前者は4世紀後葉、後者は5世紀前葉である。このように関東地域にみられる突線短頸壺の系譜は加耶地域に求めることができる。

②の鏝付二重口縁壺（第3図5）は国内での出土例が少なく、北九州博多市の西新町遺跡等に4世紀前半の軟質土器が認められる。参考例として挙げた陶質土器の鏝付二重口縁壺（第3図6）は、全羅南道扶安郡扶安竹幕洞祭祀遺蹟（註23）の祭祀中心部から3個体出土したうちの1点である。この鏝付二重口縁壺（第3図6）は、韓半島西側の漢江流域から錦江流域の百済地域に比較的多く認められる二重口縁壺で、おそらく竹幕洞祭祀遺蹟は分布圏の南縁にあたり、この例は4世紀後半とみられる。したがって韓国の出土例は、土器の系譜をみるための参考であることを断っておきたい。

突線短頸壺（第3図2）は和泉式高坏（第3図7）また、鐔付二重口縁壺（第3図5）は和泉式高坏（第3図8）とそれぞれ同じ住居跡から出土し、同伴関係が認められるものである。何れも和泉式成立期のⅠ期新相であることが明らかである。即ち、韓半島東西2つの系統・系譜の壺の受容は、平底鉢・平底深鉢よりやや遅れるが、関東地域では5世紀前葉段階には始まっていたことが指摘できる。

1.3 陶質丸底甕の系譜

伊興遺跡（第1図21）からは、陶質土器丸底甕（第2図28・29）と陶質土器模倣の高坏脚部片（第2図31）及び、軟質模倣土器の平底深鉢（第2図30）等が出土している。陶質土器の甕（第2図28・29）は、肩部が無文で球形の胴部には縄蓆文叩を施した後、幅の狭い螺旋状沈線を巡らすものである。この甕の施文技法の特徴は肩部が無文であることであり、ここに韓半島での地域の特徴が現れている。即ち、肩部が無文あるいは、肩部の縄蓆文叩や格子叩目を擦り消す施文技法は、洛東江下流域の東側にもみられるが、西側の咸安・馬山・昌原地域の甕類に比較的多く認められる特徴とみることができる。陶質土器模倣の土師器高坏は他に類例がみられない。また、伊興遺跡では初期須恵器の甕の出土が多いことも特徴である。

1.4 無蓋高坏と平底甕の系譜

白楡殿ノ前遺跡の無蓋高坏（第2図27）は、陶質系須恵器で、同伴したとされる樽形甕も同一の青紫色で緻密な焼成である。樽形甕の出自は韓半島南部西側の柴山江下流域、無蓋高坏はその東側の洛東江下流域が出自であり、両者の系統・系譜は異なるが同一焼成の可能性が高い。このように両者は、国内で揺籃期の陶器窯で焼成された陶器製品とみられる。伊興遺跡では、この無蓋高坏と同じ系譜の脚部を土師器で模倣した脚部残片（第2図31）が出土し

ているのである。

平底甕（第4図8）が内房の草刈六之台遺跡（第1図28）から出土している。底部に縄目叩が施されているが、韓半島南部では甕に縄叩（縄蓆文叩）を使用する例はみることができない。この平底甕は馬韓系であり、韓半島においても馬韓地域に平底甕の起源を求めることができる。草刈六之台遺跡出土の甕（第4図8）の系譜も馬韓系であり、この平底甕は和泉式Ⅲ期の坏（第4図7）と同一住居跡から出土していることから、5世紀後葉に位置づけられる（註24）。

戸張作遺跡（第1図25）の陶質「臺附長頸壺」（第4図9）は、嶺南地域に広く認められる新羅系の台付長頸壺で、須恵器模倣の甕（第4図11）と和泉式高坏（第4図10）が共に同一住居跡から出土している。この新羅系長頸壺（第4図9）は、和泉式Ⅲ期の5世紀後葉であり、新羅の影響が加耶や大加耶地域に及んだ時期と重なる。また、金海禮安里古墳群等の「臺附長頸壺」と類似するが、この長頸壺は蔚山・慶州地域の洛東江東側の「江東地域」を起源とするものであろう。

2 古香取海グループの形成

2.1 平底鉢と平底深鉢

古香取海グループの平台遺跡（第1図29）からは平底深鉢（第4図12）、永国遺跡（第1図31）では平底鉢（第4図14）が出土している。このうち平底深鉢（第4図12）は法量の小さいタイプである。口縁部が小さく外反し、底部が上げ底風に凹むことから在地的変化を伴うがハケ目はみられない。永国遺跡の平底鉢（第4図14）は、器壁が薄く胴部の張り出しも弱く口縁部が小さく外反するもので、ハケ目調整もみられない。東京湾グループの平底鉢（第2図30・32・第4図1）及び、後述する太平洋海岸グループ（第4図36・37）とは器形にも差異がみられ、

軟質平底鉢の直接的な模倣である。

平台遺跡の平底深鉢（第4図12）は、和泉式高坏（第4図13）と同一住居跡から出土している。この高坏は和泉式成立期のⅠ期新相であり、この時期と併行すると考えられる。永国遺跡の平底鉢（第4図14）も和泉式Ⅰ期新相である。

3 太平洋海岸南・北グループの形成

3.1 壺の系譜

東京湾グループの壺とは異なる口縁部に2条の突線を巡らすタイプの長頸壺（第3図11）が、久慈川グループ森戸遺跡（第1図32）から出土している。陶質土器の土師器模倣壺である。この類似例は金海・釜山に多くその西側の加耶地域と国内ではTG232号窯、大庭寺393-OLⅡ層等に認められる。共伴する和泉式土器はⅡ期古相であり、モデルとの時期差がある。東京湾グループの2タイプと比較して、原形に対する模倣が忠実であるにも関わらず、和泉式土器との時期差がある。

3.2 棒状把手付甑と鍛冶技術の系譜

久慈川グループ下流域左岸の森戸遺跡（第1図32）では、棒状把手付甑（第4図15）と鍛冶技術に伴う和泉式Ⅱ期古相の高坏を再利用した轆の羽口（第4図16）、土師器模倣の甗（第4図17）及び、馬韓系の平底内湾坏が共に同じ住居跡から出土している。和泉式高坏（第4図16）はⅡ期古相とみられる。土師器模倣の甗（第4図17）には、穿孔はみられないが初期須恵器甗を模倣したものとみられる。把手付甑（第4図15）は、平底で蒸気孔1+4あるいは5孔とみられ、把手は棒状把手である。蒸気孔の配置と個数からも甑の系譜は馬韓系譜とみることができると。

総じて関東・南東北地域では、大型甑で多孔の蒸気孔をもつ甑はきわめて少なく短孔が基本であり、在りでの特色が表れている。

森戸遺跡の同一住居跡から出土した内湾平底坏と甑、甗は、韓半島においても同一系統・系譜の可能性が高く、森戸遺跡の鍛冶技術は馬韓系鍛冶である可能性が導かれる。さらに韓半島系模倣土器のセットは、利根川南グループの古川端遺跡の馬韓系内湾平底坏、甗、甑を組合せたセット関係が同じであり、甗を組み入れた点を強調すれば、利根川北グループの荒砥北三木堂遺跡のセット（第2図3・4・5）とも共通している。つまり、移住民関わった集落の1つの傾向を示していると考えられる。

3.3 平底鉢

海岸グループ北夏井川下流域の龍門寺遺跡（第1図43）と請戸川下流域の鹿屋敷遺跡（第1図44）からは、平底鉢（第4図36・37）が出土している。両者とも蓋を受けることを意識して、口縁部を受け口状に立ち上げていることが特徴である。これまでに述べてきた平底鉢にない特徴であり、龍門寺遺跡と鹿屋敷遺跡の平底鉢（第4図36・37）は、胴部外面と底部側面にも一部横方向のヘラ削りがみられる。江東地域には平底鉢に蓋を伴う例をみることができると。

龍門寺遺跡の平底鉢と共伴する南小泉式土器は成立期の土器型式であり、加耶系平底碗も伴っている。この平底鉢は、利根川北グループに韓半島系土器が受容された時期と遜色がない。また、特に受け口を意識した鹿屋敷遺跡の平底鉢（第4図37）は、同じ住居跡出土の南小泉式土器から南小泉式Ⅱ期とみられる。

3.4 格子叩埴輪

久慈川グループ森戸遺跡の東側で左岸の河口部に近くに前方後円墳の権現山古墳（第1図33）が位置する。この古墳は地域社会の中では90m級の大型前方後円墳であり、明瞭な格子叩痕跡を残す円筒埴輪（第4図19）が認められる。この円筒埴輪と共に一

一般的な凸状の突帯ではなく、断面三角形の突帯が巡る円筒埴輪（第4図18）も認められる。格子印埴輪に表徴される特徴的な円筒埴輪が供献された古墳は、やはり大型前方後円墳の長野県更埴市の土口將軍塚古墳（註25）を挙げることができる。この古墳の造営段階は、関東の和泉式Ⅱ期古相であり、関東の利根川南グループと同時期である。

Ⅳ 内陸部の韓半島系土器の傾向

韓半島系土器の分布から関東・南東北は、大きく内陸部と湾岸・海岸地域の2つのグループに分けることができた。第一は関東・南東北の内陸部グループ、第二は関東・南東北海岸部グループである。これらの各グループには中小のグループが認められ、大要として各グループの韓半島系土器の系統・系譜の傾向を把握することができた。もとより本稿で取り扱った韓半島系土器の大半は、その形態模倣であり韓半島における系統・系譜を類型化することには、自ずから限りもあるがまとめてみよう。

それでは形態模倣が何故、韓半島系土器と言えるのかという問題点について説明しておきたい。「はじめに」で述べたとおり、韓半島系模倣土器とは、土器の製作技法は伴わないことが多いが、陶質・軟質土器の特徴を表す土師器で韓半島起源の土器に系譜が求められるもので、韓半島系生活様式の受容を表す1つの指標としてみるができる。

平底深鉢を例にとってみても、利根川北グループの熊野堂遺跡（第1図4）と東京湾グループの伊興遺跡（第1図21）は、約90km離れており水系も異なる。また、古香取海グループの平台遺跡（第1図29）とは距離の差だけでなく、地縁的関連性もみることができない。しかし、これらの遺跡から出土した軟質模倣土器の平底深鉢の法量には、大・小の差はみられるが共通するタイプである。このことは平底鉢

についても認められることで、第1図に示した利根川南グループの後張C遺跡（第1図10）と東京湾グループの仏向町古墳（第1図23）は、東京湾の西側から約130km離れており、水系も全く異なり地縁的関連も薄い。それにも関わらず、両遺跡の間で共通タイプの平底鉢がみられることは、他人のそら似や偶然の一致ではなく、これらの遺跡では軟質土器の平底深鉢、平底鉢のモデルの出自と系譜が共通し同じ系統の人々が関与していたことを意味する。

したがって、韓半島系模倣土器は、モデルの系譜との繋がり示す有効な手掛かりを与えていると考えられる。特に、そのモデルの出自と系譜を認識することが多くの意味を持っている。例えば、韓半島系移住民のネットワークや地域間取引に関することである。

さて、利根川北グループの軟質系平底鉢・平底深鉢等は、和泉式成立期に出現していることが再確認され、坏・椀類の個人別食器（銘々器）も同一の契機と系譜であることは、拙稿（註26）で既に指摘したとおりである。加耶地域の平底鉢・平底深鉢の口縁部は、概して短く外傾し蓋を受けるタイプである。洛東江東側の江東地域では、蓋を受けることを意識して口縁部が強く外傾するタイプが多く、中には口縁部を受け口状に立ち上げるものも認められる。

今回挙げた利根川北グループの平底鉢、平底深鉢、甌等の軟質土器の系統・系譜は2節1項でも述べたとおり、加耶地域にその系譜を求めることができる。また、坏・椀類には加耶系と馬韓系あり、馬韓系が若干遅れて時期差もみられるが、多くは重なり混在して認められる。利根川北グループは加耶傾向が主体として先行し、若干遅れて一部に馬韓系の導入と受容が行われたと言える。

このグループの大きな特徴は韓半島系土器の集中であり、河川交通と陸路との結節点であると同時に、

古墳中期初頭の広瀬川流域の浅間山古墳（172m）、鮎川流域の中期前葉の白石稻荷山古墳（175m）という、東国でも最大級の前方後円墳が造営され、地域的核が形成された地域である。言うに及ばず、利根川南グループに近い独立的な太田天神山古墳（210m）は、陸路と河川交通に拠る韓半島系技術・文化を東西に結ぶ結節点としても位置づけることができる。このように、韓半島系土器群の集中と大型前方後円墳の造営及び地域的核の形成には、一定の相関関係が存在し、古墳時代中期における地域社会の再編成と一体の歴史的出来事であったと指摘することができる。

利根川南グループの平底鉢、平底深鉢、甗も多くは加耶系とみられるが、一方、甗には棒状把手の馬韓系タイプが認められ、内湾平底杯の底部には「コの字形」杵痕（ゲタ痕）が残る。このグループは製作技法からも馬韓傾向が利根川北グループより目立つことが特徴と言える。延享割遺跡では陶質系有蓋高杯の蓋と須恵器甗、古川端遺跡では内湾平底杯、甗、甗とがセットで相伴していることが指摘できる。

これらの韓半島系土器の組合は、利根川北グループでもみられたとおり、荒砥北三木堂遺跡では、初期須恵器甗の出土例が多く、平底深鉢と模倣甗及び須恵器無蓋高杯が相伴している。韓半島系模倣土器の組合せは箇々の遺跡で異なり、その系譜も伽耶系と馬韓系が重なり単純ではない。しかし、韓半島系模倣土器が単体で出土することは稀で、甗が組合せの軸となる例が多いことが指摘できる。このように利根川南・北グループでは、韓半島系譜の共通性と地縁的關係から、韓半島東西の移住民ネットワークが形成された可能性が高い。また、利根川南・北グループは、関東北部における韓半島情報と技術・文化が集積された地域的拠点として位置づけること

ができる。

渡瀬川グループと鬼怒川グループでは馬韓系平底甗も認められるが、搬入品であり交易等で移動するため、平底甗は必ずしも馬韓系の人々との交流関係を意味しない。一方、鬼怒川グループの殿山遺跡出土のミニチュア把手付蓋は、百済が馬韓を領有化する6世紀以前の馬韓地域にも認められることから、鍛冶技術は百済系あるいは、馬韓系の人々との交流関係を通して導入された可能性を否定することはできない。ミニチュア蓋の系譜がもつ意味は小さくないだろう。渡瀬川・鬼怒川・小貝川流域グループの韓半島加耶系と馬韓系模倣土器は、重なる傾向を示すと言える。そして、和泉式成立期に韓半島百済・馬韓系の鍛冶技術が導入されたことを知ることができた。

阿武隈川グループ南端、三森遺跡の加耶系陶質土器も鍛冶技術の系譜が結びつくとは限らないが、この遺跡には内湾平底杯がみられ、鬼怒川・小貝川グループ及び、久慈川グループの傾向との類似点が認められる。三森遺跡の鍛冶技術は、加耶系あるいは馬韓系と言えるであろう。このように鍛冶技術の系譜をみてくると、鬼怒川グループと久慈川グループの鍛冶技術の系譜は百済・馬韓系の可能性が高く、阿武隈川上流域は馬韓系か加耶系どちらも否定しがたい傾向と言えよう。これらの韓半島系譜の繋がりをみると鬼怒川・小貝川グループと阿武隈川上流域グループには、ゆるやかな韓半島系移住民ネットワークを想定することができるだろう。

V 海岸地域の韓半島系土器の傾向

東京湾グループ、古香取海グループの軟質模倣平底鉢・平底深鉢についても、利根川上流域グループとほぼ同様に和泉式成立期にみられることが確認された。前項でも述べたとおり、伊興遺跡（第1図21）

の平底深鉢と熊野堂遺跡（第1図4）及び、平台遺跡（第1図29）出土の平底深鉢、また、仏向町古墳（第1図23）周溝の平底鉢と後張遺跡C遺跡（第1図10）の平底鉢、戸張作遺跡（第1図25）と後張遺跡（第1図10）の平底鉢が類似していることを指摘した。これらは何れも加耶系の軟質模倣土器であることから、細い糸ではあるが広域的移住民ネットワークが形成されたと考えられる。

一方、陶質土器模倣2タイプの壺のうち、和泉遺跡の突線短頸壺（第3図1）は加耶系、城の腰遺跡の鍔付二重口縁壺（第3図5）は百済系であり、韓半島東・西両地域の系譜が認められる。内房における百済系は他にも点として和泉式成立期の土器と共伴した無頸壺が認められる。この韓半島東・西2つの系統・系譜は、伊興遺跡の加耶系陶質丸底甕と同系譜の模倣平底深鉢・高坏、大森第2遺跡（第1図27）の百済系平底鉢・平底坏にみることができ、韓半島系譜のまとまりが他のグループと比較して鮮明である点が特徴である。

このように東京湾グループには、加耶系・百済系東西2つの地域の移住民と直接的に関わる遺跡が認められ、双方の系譜には大きな差異が認められる。つまり、東京湾グループの和泉式成立期の軟質模倣土器は、主に加耶・百済地域と一部馬韓地域の3つの傾向をみることができると言える。同時に、伊興遺跡は祭祀遺構を伴い古東京湾の河口に位置する地理的条件から、海上・河川交通による舶載品をはじめとする、物資の交易と人々の交流を結ぶ地域交易の結節点であり、物流センター的役割を担っていたと考えられる。先に述べた、元荒川上流部の武良内遺跡（第1図19）、旧入間川の白鉄遺跡も情報や物資の交易と共に中継基地であったことであろう。

内房の陶質「臺附長頸壺」は、嶺南地域に広く認められる新羅系の特徴的長頸壺である。5世紀後葉

に初めて内房に新羅系が現れたことの意味について、広くはこの時期に加耶が衰退するという韓半島情勢の変化の現れとして捉えられるであろう。しかし、同時に内房では、5世紀後半の加耶系模倣土器も認められ、韓半島系移住民との繋がりが大きく変化したことではないと考えられる。

古香取海グループと海岸グループには、軟質模倣土器の平底鉢・平底深鉢が認められるが、古香取海グループの永国遺跡（第1図31）の平底鉢は、軟質平底鉢と近似するタイプである。平台遺跡（第1図29）の平底深鉢は在地技法を伴うが、和泉式高坏Ⅰ期新相に位置づけられる。また、尾坪台遺跡（第1図30）では加耶系平底碗がみられ、内海という地理的環境から海上・河川交通に拠る鬼怒川・小貝川グループとの交通の要衝であり、規模はともかく地域交易の役割を担う中継基地として、物資の交易と人々の交流を結ぶ結節点であったと考えられる。

東京湾グループ2つの短頸壺タイプの陶質土器に加えて、3節1項で指摘したとおり、久慈川グループ森戸遺跡（第1図32）では、加耶系陶質土器の模倣壺が認められた。また、鍛冶技術は和泉式Ⅱ期古相に馬韓系鍛冶が導入された可能性が高いことも導かれた。即ち、1つの遺跡で加耶系と馬韓系が二重に重なることから、移住民は1つのまとまりとして混成であったとみることができる。この傾向は関東各グループにおける、韓半島系移住民のまとまり方の特徴であると言えよう。

夏井川・請戸川グループの龍門寺遺跡出土の平底鉢（第4図36）は、既に指摘したとおり、森戸遺跡より古式であり利根川北グループに韓半島系土器が受容された時期と遜色がない。また、鹿屋敷遺跡の平底鉢（第4図37）は在地技法も加えられているが、江東地域の軟質平底鉢に近い模倣である。このように海岸部には、地理的距離の差ではなく韓半島系土

器の直接的な受容が認められることが特徴である。

総じて、韓半島系土器を受容した地域の中で、内陸部①利根川北・南グループ、鬼怒川・小貝川グループ、阿武隈川グループという繋がり②海岸部の東京湾グループと香取海グループ、③久慈川グループ、夏井川・請戸川グループの3つの大きなグループをそれぞれ細い糸で結ぶ広域移住ネットワークが形成された可能性もあると言えよう。

このように韓半島系先進技術の導入や生活様式を受容についてみると、移住民との交流関係は韓半島南部の東西における、主として加耶地域と馬韓地域の2つの系統・系譜が相互に重なって入り組んでおり、百済系や新羅系は面的な広がりには少ない傾向であるといえよう。特に加耶系と馬韓系は、日常生活レベルで韓半島系移住民として混在していたと考えられる(註27)。

VI 韓半島系技法の導入と地域首長層

韓半島系土器の受容に伴って、情報と技術、物資等が主として大和・河内経由で導入・受容された。その一端として、関東地域の利根川南グループと久慈川グループには、在地首長層の古墳に韓半島系格子叩技法の埴輪が供献されていた。この節で改めて、地域首長墓の造営と地域共同体及び韓半島系技法との関係から、古墳時代中期における当面する問題点と若干の論点をとまとめておきたい。

まず一般的に、古墳時代を通して地域首長墓が3世紀末から7世紀前葉の3世紀以上にわたって、継続的に造営されたシステムについて、従来の説明では地域首長が、地域社会の支配と掌握を行うピラミッド形の地域支配という構図と支配論で説明されてきた。これに対して本稿では地域首長古墳の造営は、その古墳の造営自体が地域共同体を支える“共同体事業”といういわば、地域循環型の利益還元を伴う

性格をもっていたと考えている。

即ち、地域首長古墳の造営は、首長層に集約された余剰を共同体成員への様々な利益として還元する地域社会システムとして成立していたと考えられる。また、首長にとっても古墳の造営活動は、共同体内における首長自身のリーダーとしての立場を成員に再確認させ、儀礼を通して誇示することのできる場面であったと推定できる。即ち、共同体成員及び首長両者にとってメリットのある政治と経済両面での社会的活動であったことから、3世紀後葉から7世紀前葉の3世紀以上の長期にわたり、地域首長古墳の造営が維持されたという説明である。

この意味で地域首長古墳の造営は、地域社会に支えられて施行されたことであり、それ故に共同体と首長との間に継続的で相互補完的な地域社会システムが構築されたと理解することができるのである。したがって地域首長墓の造営は、地域共同体の記念物としても位置づけられ、この地域社会秩序の維持と共同体への還元という二つの側面を持った“共同体記念物”として把握できるのである。このように地域首長墓の造営は、共同体に支えられた記念物として位置づけられ、この地域首長古墳の造営システムが地域社会秩序の維持と共同体の利益になる限り、また、外圧による社会秩序の変容が伴わない場合、地域首長墓の造営が継続的に地域共同体の社会秩序を維持しそれを示す表徴であり続けたのである。

翻って、利根川南グループと久慈川グループの地域首長古墳には、格子叩技法の円筒埴輪が供献されていた。この具体例に基づいてみれば、これらの地域では①韓半島系技術者が在地首長層の古墳造営に関わったこと。②韓半島系技術者を地域首長層が掌握して、地域共同体に組み入れて組織化していたこと。上記した地域社会システムからみれば、③在地

首長層の権力の象徴としてのみ古墳造営が行われたのではないこと。④地域首長古墳は、地域共同体の記念物としてその成員が造営を支え、共同体には利益が還元される地域循環型システムとして古墳造営が成立していたと考えられること。⑤この地域共同体システムの中に韓半島系移住民の存在が位置づけられていたことが、大きな意味をもっていること等が、当面考えられることである。

韓半島系移住民が古墳造営に参加しても、格子叩埴輪がみえる筈もなく、その意味は韓半島系の鍛冶・土木・灌漑技術、馬の飼育、畑作開発とその普及、機織り等の先進技術導入は地域開発のシンボルである。つまり地域共同体における移住民の役割の表徴として、韓半島系技法を表す格子叩技法の埴輪が地域首長古墳に巡らされたと理解できる。このことは、古墳時代中期の首長層の古墳には生産と開発に欠くことができない鉄製農具・鉄製工具等が集中的に副葬され、その代表的副葬品として位置づけら

れることから知る事ができる。地域社会の盟主とみとみられる大型前方後円墳に格子叩埴輪が供献された例は、前方後円墳の長野県更埴市土口將軍塚古墳にもみることができるが、関東における地域首長墓造営と同一の契機と役割及びシステムが考えられる。

最後に、韓半島系模倣土器の分布からは、韓半島系技術や文物の集積が地域社会の核の形成に関わり、その移動が陸路、海路、河川の各交通システムの再編と重なったことが指摘できる。陸路では乗馬の普及が高速通信手段となり、情報量も格段に増加したことが重要な意味をもっている。この多重構造の交通路の結節点の集落には、韓半島系模倣土器が集中して分布する傾向と特徴がある。このように交通路の再編成は、古墳時代中期の関東・南東北地域の社会システムの再編と地域社会の形成に重要な位置を占め、各地域社会間の結合に関わる地域社会システムの再構築が行われたと考えられる。

註

- (1) 安在皓 「土師器系軟質土器考」『伽倻と東古代アジア』新人物往来社 1993年
- (2) A 坂野和信 「和泉式後期土器の様相」本庄市歴史民族資料館『紀要』1988年。
B 坂野和信 「和泉式土器式の成立とその背景」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991年。
C 坂野和信 「和泉式土器の成立について」『土曜考古』16号 土曜考古学研究会 1991年
- (3) 坂野和信 「畿内と東国の古墳中期における韓半島系食器」『考古学雑誌』第89巻 第3号 2005年。本稿では図示しなかった韓半島南部と大和・河内の食器については、この論考を参照して頂きたい。また、畿内では定着しなかった馬韓系の内湾平底杯、加耶系の平底椀等の平底食器が関東・南東北地域に認められること等を論じた。
- (4) 前掲（註2 A・B・C）
- (5) A 黒田 晃 「剣崎長瀬西遺跡と渡来人」『高崎市史研究』第12号 高崎市史編さん専門委員会 2000年。
B 「剣崎長瀬西遺跡1」高崎市教育委員会 2001年
- (6) 朴淳發 「深鉢形土器考」『湖西考古学』第4・5合輯 湖西考古学会 2001年。百済の「深鉢形土器」（平底深鉢）の型式分類とその変遷過程の分析から、百済領域の拡大と深鉢形土器が韓半島中南部に拡散したことが「百済の領域拡大過程と一致している」と指摘している。また、榮山江下流域では5世紀前半にも格子叩系が存在し、格子叩系の完全消滅段階は、5世紀後半であると述べている。
- (7) 岡戸哲紀ほか『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府埋蔵文化財調査研究センター報告書 第90輯 1995年。TG231・TG232号窯 所収。
- (8) 須恵器編年については田辺昭『須恵器大成』角川書店1981年の陶邑窯須恵器編年、TK73号窯式・TK216号窯式・

ON46号窯式は、この文献に基づく。また、揺籃期の須恵器は、TG231号・232号→ON231号窯→濁り池窯→TK73号窯式までの土器型式である。

- (9) 坂野和信「東日本における古墳時代中期の土器」(1) p372、373、また、地域的核の形成については、p368・371を参照『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1999年
- (10) 『羅州徳山里古墳群』国立光州博物館学術叢書 第78冊 全南大学校博物館 羅州市 2002年 所収。
この古墳群の8号墳周溝と11号墳周溝から棒状把手付甑が出土している。8号墳出土の甑は、格子叩のものと同平行叩技法の二者、11号墳出土の甑は平行叩技法である。この2基の古墳は5世紀第3四半期から第4四半期に位置づけられている。底部が残るものは蒸気孔1+5と1+6があり、何れも底部周縁の蒸気孔は周縁に沿って台形状に穿たれている。この蒸気孔の形は異なるが、その配置と数は古川端遺跡、武良内遺跡の甑に類似している。本来的に馬韓地域の棒状把手付甑には切り込みを入れないが、5世紀後半には加耶系の影響で浅い切り込みがみられる。なお、沈奉謹 東亜大学校博物館1981年報告の『金海府院洞遺跡』A区Ⅱ層出土の甑には1+6の円形蒸気孔を穿つものが1例認められるが、加耶地域では少ない。
- (11) A 小久保 徹・柿沼幹夫『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集 埼玉県教育委員会 1978年。
B 坂野和信「畿内と東国の古墳中期における韓半島系食器」『考古学雑誌』第89巻 第3号 2005年
- (12) 山川守男ほか『城北遺跡』発掘調査報告 第150集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995年
- (13) 趙榮濟・朴升圭ほか『陝川玉田古墳群Ⅱ M3號墳』慶尚大學校博物館 慶尚大學校博物館調査報告 第6輯 1990年
- (14) 尹根一・金洛中・曹美順『羅州新村里第9號墳』発掘調査報告書 国立文化財研究所 2001年。
- (15) 「有孔壺」靈岩郡内洞里2號墳甕棺墓『百濟土器圖録』百濟遺物圖録第2輯 p305・456 百濟文化開發研究院 1984年
- (16) 『靈岩萬樹里 4號墳』国立光州博物館学術叢書 第20冊 国立光州博物館靈岩郡 1990年
- (17) 『靈岩萬樹里 古墳群』2號墳 国立光州博物館 百濟文化開發研究院 1984年
- (18) 前掲(註7)と同じ
- (19) 坂野和信「南小泉式土器の系譜と地域性」『古代祭祀 建鉾山遺跡Ⅱ』吉川弘文館 1998年
- (20) 定森秀夫「陶質土器からみた東日本と朝鮮」青丘学術論集 第15集 (財)韓国文化財研究振興財団 1999年
- (21) 申敬澈ほか『金海禮安里古墳群Ⅱ』釜山大學校博物館遺蹟調査報告 第15輯 釜山大學校博物館 1993年
- (22) 金宰佑ほか『金海徳亭遺蹟Ⅰ』慶星大學校博物館 慶星大學校博物館 研究叢書 第8輯 2001年
- (23) 『扶安 竹幕洞祭祀遺蹟』国立全州博物館 国立全州博物館学術調査報告書 第1輯 1994年
- (24) 前掲(註10)『羅州徳山里古墳群』の14號墳からも平底甕が出土しており、6世紀前半とみられる。
- (25) 岩崎卓也ほか『土口将軍塚古墳』一重要遺跡確認緊急調査—長野市・更埴市教育委員会 1987年
- (26) 前掲(註2B)と同じ
- (27) 前掲(註11B)論文で述べたとおり、関東・南東北地域において韓半島馬韓・金官地域の食器は、大和・河内の「倭」の食器と同伴関係が認められた。即ち、韓半島情報や技術・文化、文物の導入と受容は、大筋として大和・河内経由であったことが明らかである。

謝辞 本論を草するにあたり、韓半島加耶地域の土器の観察に際して、釜山大學学校 申敬澈氏、東亜大學校 車漢秀氏、また、百濟・馬韓地域では釜山大學校 山本孝文氏、忠南大學校 朴淳發氏には大変お世話になりました。また、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の諸氏の協力があつたことを記して感謝いたします。本稿は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の平成15度の研究助成を得て行った、研究成果の一部である。

挿図に使用した文献 (第1図は第2・第3・第4図と重複するため省略)

第2図 関東地域の韓半島系土器 (1)

1・2：空沢遺跡35号墳 大塚昌彦『空沢遺跡第8次発掘調査報告書』渋川市教育委員会 1988年

3・4・5：荒砥北三木堂遺跡 石坂茂ほか『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第110集群馬県教

育委員会 1991年

- 6：柳久保遺跡 前原 豊『柳久保遺跡群Ⅶ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988年
- 7・8：熊野堂遺跡『熊野堂遺跡(2)』女屋和志雄・関根慎二
上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告 第100集 群馬県教育委員会 1990年
- 9・10・11：温井遺跡 大江正行『温井遺跡』関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 群馬県教育委員会
1989年
- 12：後張C遺跡 恋川内昭彦氏が発掘調査した。前掲(註2B)
- 13：後張遺跡 増田逸朗・立石盛司『後張I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第15集 1982年
- 14・15・16・17：延享割遺跡 天笠洋一『延享割遺跡発掘調査報告書』群馬県太田市教育委員会 1996年
- 18・19平塚遺跡 恋河内昭彦『平塚・左口・児玉条里遺跡』埼玉県児玉町教育委員会 1990年
- 20：古川端遺跡 前掲(註9A・B)
- 21：武良内遺跡 金子真土ほか『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第11集 埼玉県教育委員会 1977年
- 22・23：諏訪遺跡 小久保徹・柿沼幹夫『下田・諏訪』上越新幹線埋蔵文化財調査報告Ⅲ 第21集 埼玉県教育委員会
1979年
- 24：金鑽神社古墳 A 増田逸朗・坂本和俊・佐藤好司『埼玉県古式古墳発掘調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986年。
B 菅谷浩之『北武蔵における古式古墳の成立』1987年
- 25：生野山古墳 A 柳田敏司「埼玉県児玉郡生野山將軍塚古墳調査概報」『上代文化』1964年。
B 乾 芳宏・亀谷泰隆「埼玉県生野山將軍塚採取の埴輪片」『考古学ジャーナル97』1973年
- 26：公卿塚古墳 増田逸朗・坂本和俊・佐藤好司『埼玉県古式古墳発掘調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986年
- 27：白敏殿ノ前遺跡 『浦和市史』 第一巻 考古資料編 浦和市総務部市史編さん室 1974年
- 28～31：伊興遺跡 松本 晃ほか『伊興遺跡』東京都足立区伊興遺跡調査会 1997年
- 29～30：仏向町古墳周溝 滝沢 亮「神奈川県 編年」『古墳時代土器の研究』pL.I-6 1984年
- 第3図 関東地域の韓半島系土器(2)
- 1：和泉遺跡：榊原淳雄 杉原荘介「武蔵和泉遺跡調査概報」『考古学』第11巻 5号 1940年
- 2・7：城の腰遺跡114号住居跡 菊池真太郎ほか「城の越・西屋敷遺跡」千葉県文化財センター 1979年
- 3：金海市金海徳亭遺跡12号墓 前掲(註20)
- 4：金海郡禮安里古墳群 前掲(註19)
- 5・8：法蓮寺山遺跡5号住居跡 栗本佳弘ほか『小金線』千葉県都市公社 1973年
- 6：扶安郡扶安竹幕洞祭祀遺蹟中心部 前掲(註21)
- 9～10：城北遺跡118号住居跡 前掲(註12)
- 11：森戸遺跡111号住居跡 西野則夫・浅井哲也『森戸遺跡・北郷C遺跡』茨城県教育財団調査報告 第55集 1990年
- 12：峡川郡玉田古墳群M3號古墳 前掲(註13)
- 13：羅州郡新村里第9號墳乙甕棺墓 前掲(註15)、p100(74)
- 14：下芝五反田遺跡 若狭 徹ほか『よみがえる5世紀の世界』かみつけの里博物館 1999年
- 15～18：剣崎長瀨西遺跡 前掲(註5A・B)
- 第4図 関東地域の韓半島系土器(3)
- 1～4：大森第2遺跡68号住居跡 古内 茂・真下高宰ほか「大森第2遺跡」『京葉』日本道路公団 1973年
- 5・6：草刈六之台遺跡310号住居跡 7・8：草刈六之台遺跡806号住居跡 白井久美子ほか千原台ニュータウンⅥー
『草刈六之台遺跡(第2分冊)千葉県文化財センター調査報告』第241集 1994年
- 9～11：戸張作遺跡117号 菊池健一『千葉県戸張作遺跡』千葉市文化財調査協会 1998年
- 12・13：平台遺跡32号住居跡 鈴木三治『平台遺跡』茨城県教育財団調査報告 第19集 1983年
- 14：永国遺跡13号住居跡『永国遺跡』日本窯業史研究所 1983年
- 15～17：森戸遺跡70号住居跡 西野則夫・浅井哲也『森戸遺跡・北郷C遺跡』茨城県教育財団調査報告 第55集 1990年

- 18・19：権現山古墳 榎村宣行ほか『久慈川流域の前期・中期古墳』 多久那研究会 2004年
 20：白山台遺跡包含層 日向野徳久『白山台遺跡』 栃木市教育委員会 1976年
 21：二ノ谷遺跡2号住居跡 小森哲也・田代 隆・仲山英樹『二ノ谷遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告 第97集 1988年
 22：殿山遺跡KT-121号住居跡 23・24：KT-65号住居跡 吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一『殿山遺跡』 日本窯業史研究所 1995年
 25：靈岩郡内洞里2号墳甕棺墓 前掲（註15）
 26：靈岩郡萬樹里4号墳1号土壙木槨墓 前掲（註16）
 27：靈岩郡萬樹里2号墳1号甕棺墓：前掲（註17）
 28：殿山遺跡KT-28号住居跡『殿山遺跡』 日本窯業史研究所 1995年
 29：砂部遺跡SI-157号住居跡 30：砂部遺跡SI-434号住居跡
 菊井和美・藤田典夫・仲山英樹『砂部遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告 第108集 1990年
 31・32：三森遺跡4号住居跡 33：三森遺跡51A土壙：前掲（註19）
 34：辰巳城遺跡17号住居 山内幹夫『辰巳城遺跡（第2次）』 母畑地区遺跡発掘調査報告31 福島県教育委員会 1991年
 35：南山田遺跡1号墳周溝 柳田和也ほか『南山田遺跡（第一冊）』 郡山市教育委員会 1991年
 36：龍門寺遺跡4号住居跡 高島好一ほか『龍門寺遺跡』 いわき市教育委員会 1985年
 37：鹿屋敷遺跡2号住居跡 山田 廣『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』 双葉郡浪江町教育委員会 1989年

挿図掲載の土器出土遺跡・遺構

第1図 関東・南東北の古墳中期主要韓半島系土器出土遺跡

- 1：群馬県渋川市空沢遺跡35号墳 2：前橋市荒砥北三木堂遺跡 3：前橋市柳久保遺跡 4：高崎市熊野堂遺跡
 5：群馬県箕郷町下芝五反田遺跡 6：高崎市剣崎長瀨西遺跡 7：高崎市不動産東遺跡 8：高崎市流通団地Ⅱ遺跡
 9：藤岡市温井遺跡 10A：埼玉県児玉郡児玉町後張遺跡 10B：児玉郡児玉町後張C遺跡 11：児玉郡児玉町平塚遺跡
 12：児玉郡児玉町金鑽神社古墳 13：児玉郡児玉町生野山古墳 14：本庄市諏訪遺跡 15：本庄市古川端遺跡
 16：本庄市公卿塚古墳 17：太田市延享割遺跡 18：深谷市城北遺跡 19：行田市武良内遺跡 20：浦和市白鍬殿ノ前遺跡
 21：東京都足立区伊興遺跡 22：狛江市和泉遺跡 23：神奈川県横浜市仏向町古墳 24：千葉県船橋市法蓮寺山遺跡
 25：千葉市戸張作遺跡26：千葉市城の腰遺跡 27A・B：千葉市大森第2遺跡 28A・B：市原市草刈六之台遺跡
 29：茨城県竜ヶ崎市平台遺跡 30：竜ヶ崎市尾坪台遺跡 31：土浦市永国遺跡 32A・B：那珂郡那珂町森戸遺跡
 33：那珂郡東海村権現山古墳 34：栃木県下都賀郡岩舟町赤羽遺跡 35：栃木市白山台遺跡 36：河内郡南河内町二ノ谷遺跡
 37：河内郡上三川町殿山遺跡 38A・B：河内郡高根沢町砂部遺跡 39：福島県白河郡表郷村三森遺跡 40：白河郡玉川村辰巳城遺跡
 41：郡山市南山田遺跡 42：伊達郡国見町下入ノ内遺跡 43：いわき市竜門寺遺跡 44：双葉郡浪江町鹿屋敷遺跡

※遺跡の番号は表：関東・南東北古墳時代中期の主要韓半島系土器出土遺跡の番号と一致

第2図 関東地域の韓半島系土器（1）

- 1・2：空沢遺跡35号墳 3～5：荒砥北三木堂遺跡2区43号住居跡 6：柳久保遺跡46号住居跡 7・8：熊野堂遺跡4-2号住居跡
 9～11：温井遺跡35号住居跡 12：後張C遺跡193号住居跡 13：後張遺跡12号住居跡 14：延享割遺跡20号住居跡
 15～17：延享割遺跡23号住居跡 18・19平塚遺跡谷部東側 20：古川端遺跡8号住居跡 21：武良内遺跡2号住居跡
 22・23：諏訪遺跡9号住居跡 24：金鑽神社古墳 25：生野山古墳 26：公卿塚古墳 27：白鍬殿ノ前遺跡
 28～31：伊興遺跡 32～33：仏向町古墳周溝

第3図 関東地域の韓半島系土器（2）

- 1：和泉遺跡 2・7：城の腰遺跡114号住居跡 3：慶尚南道金海市金海徳亭遺跡12号墓 4：慶尚南道金海郡禮安里古墳群
 5・8：法蓮寺山遺跡5号住居跡 6：全羅南道扶安郡扶安竹幕洞祭祀遺蹟中心部 9～10：城北遺跡118号住居跡
 11：森戸遺跡111号住居跡 12：慶尚南道峽川郡玉田古墳群M3号古墳 13：全羅南道羅州郡新村里第9号墳乙甕棺墓
 14：下芝五反田遺跡 15～18：剣崎長瀨西遺跡

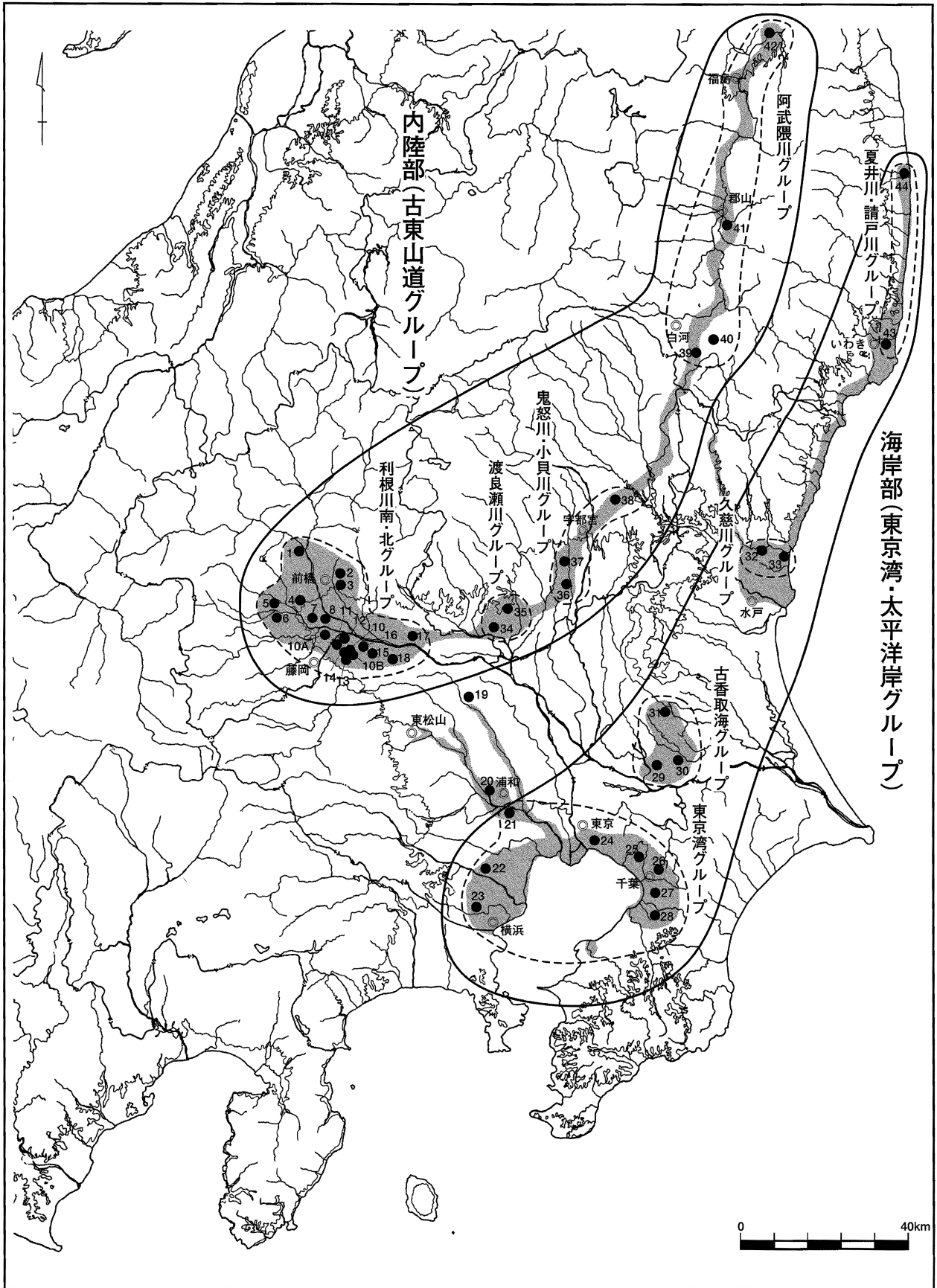
第4図 関東・南東北地域の韓半島系土器 (3)

1～4：大森第2遺跡68号住居跡 5・6：草刈六之台遺跡310号住居跡 7・8：草刈六之台遺跡806号住居跡 9～11：戸張作遺跡117号住居跡 12・13：平台遺跡32号住居跡 14：永国遺跡13号住居跡 15～17：森戸遺跡70号住居跡 18・19：権現山古墳 20：白山台遺跡 21：二ノ谷遺跡2号住居跡 22：殿山遺跡KT-121号住居跡 23・24：殿山遺跡KT-65号住居跡 25：全羅南道靈岩郡内洞里2號墳甕棺墓 26：同靈岩郡萬樹里4號墳1號土壙木槨墓 27：同靈岩郡萬樹里2號墳1號甕棺墓 28：殿山遺跡KT-28号住居跡 29：砂部遺跡SI-157号住居跡 30：砂部遺跡SI-434号住居跡 31・32：三森遺跡4号住居跡 33：三森遺跡51A土壙 34：辰巳城遺跡17号住居跡 35：南山田遺跡1号墳周溝 36：龍門寺遺跡4号住居跡 37：鹿屋敷遺跡2号住居跡

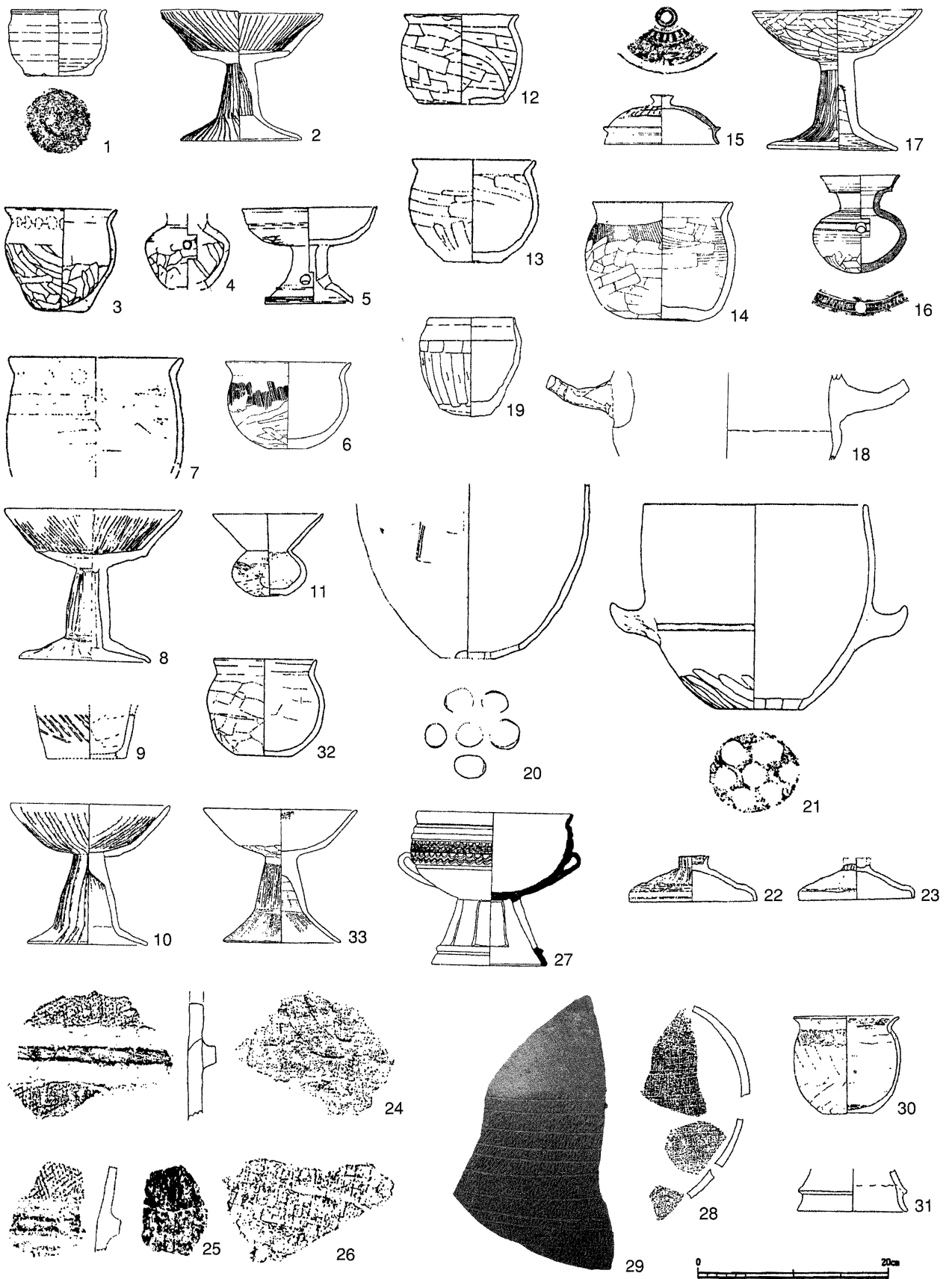
表 関東・南東北古墳時代中期の主要韓半島系土器出土遺跡

番号	遺跡名	器種・技法	出土遺構	和泉式土器の時期
1	群馬県渋川市空沢遺跡35号墳	平底鉢(軟質土器)	円墳(積石塚)	I期/5世紀前葉
2	前橋市荒砥北三木堂遺跡	平底鉢・甗(土師器模倣)・須恵器高坏	2区43住居跡	I-2期/5世紀前葉
3	前橋市柳久保遺跡	平底坏・平底鉢(軟質土器)	46号住居跡	I-2期/5世紀前葉
4	高崎市熊野堂遺跡	平底坏・平底深鉢(土師器模倣)	4-2号住居跡	I期/5世紀前葉
5	群馬郡箕郷町下芝五反田遺跡	壺or甗(格子叩き・土師器模倣)	祭祀遺構	5世紀後半
6	高崎市劍崎長瀨西遺跡	甗・甗(格子・平行叩き・牛角把手、切り込みあり)	積石塚・住居跡	II-1期/5世紀前半
7	高崎市不動産東遺跡	甗(土師器・ごく一部格子叩き)	包含層	5世紀後半
8	高崎市流通団地II遺跡	甗・甗(土師器・平行叩き)	包含層	5世紀
9	藤岡市温井遺跡	平底深鉢(軟質土器)	35号住居跡	I-2期/5世紀前葉
10A	児玉郡児玉町後張C遺跡	平底坏・平底鉢(土師器模倣)	193号住居跡	I-1期/5世紀前葉
10B	埼玉県児玉郡児玉町後張遺跡	平底坏・平底鉢・甗(土師器模倣)	187号住居跡	I-1期/5世紀前葉
11	児玉郡児玉町平塚遺跡	平底坏・甗(土師器模倣)	谷部東側	I-2期/5世紀前葉
12	児玉郡児玉町金鑽神社古墳	円筒埴輪(格子叩き)	大型円墳(67m)	5世紀前葉
13	児玉郡児玉町生野山古墳	円筒埴輪(格子叩き)	大型円墳(65m)	5世紀前葉
14	本庄市諏訪遺跡	蓋(土師器模倣)	9号住居跡	III期/5世紀後葉
15	本庄市古川端遺跡	平底坏・甗(蒸気孔1+5・土師器模倣)	8号住居跡	II-1期/5世紀中葉
16	本庄市公卿塚古墳	円筒埴輪(格子叩き)	大型円墳(60m)	5世紀中葉
17A	太田市延享割遺跡	平底鉢(土師器模倣)	20号住居跡	II-1期/5世紀中葉
17B	太田市延享割遺跡	高坏蓋(陶質系土器・二段櫛歯列点文)	23号住居跡	I-2期/5世紀中葉
18	深谷市城北遺跡	壺の蓋(土師器模倣)	118号住居跡	5世紀末(鬼高式)
19	行田市武良内遺跡	平底坏・甗(蒸気孔1+6・土師器模倣)	2号住居跡	I-2期/5世紀前葉
20	浦和市白銀殿ノ前遺跡	無蓋高坏・樽形甗(陶質系土器)	土壌?	I-2期/5世紀前半
21	東京都足立区伊興遺跡	甗(陶質・縄文叩き)・平底深鉢(土師器模倣)	グリット	5世紀前半
22	粕江市和泉遺跡	突線短頸壺(口縁部突線・土師器模倣)	住居跡?	5世紀前半
23	神奈川県横浜市仙向町古墳	平底鉢(土師器模倣)	古墳周溝	I-2期/5世紀前半
24	千葉県船橋市法蓮寺山遺跡	鏝付壺(土師器模倣)	5号住居跡	I-2期/5世紀前葉
25	千葉市戸張作遺跡	壺(陶質土器)甗(土師器模倣)	177号住居跡	III期/5世紀後葉
26	千葉市城の腰遺跡	突線短頸壺(口縁部突線・土師器模倣)	114号住居跡	I-1期/5世紀前葉
27A	千葉市大森第2遺跡	平底坏・平底深鉢(軟質土器・平行・格子叩き)	68号住居跡	I-2期/5世紀前葉
27B	千葉市大森第2遺跡	高坏(陶質系土器)	37号住居跡	III期/5世紀後葉
28A	市原市草刈六之台遺跡	平底甗(須恵器)	806号住居跡	III期/5世紀後葉
28B	市原市草刈六之台遺跡	平底鉢(土師器模倣)・壺(須恵器、内面同心円文当て具)	310号住居跡	III期/5世紀後葉
29	茨城県竜ヶ崎市平台遺跡	平底深鉢(土師器模倣)	32号住居跡	I-2期/5世紀前葉
30	竜ヶ崎市尾坪台遺跡	平底碗・平底坏(土師器模倣)	14号住居跡	I-2期/5世紀前葉
31	茨城県土浦市永国遺跡	平底鉢(土師器模倣)	13号住居跡	I-2期/5世紀前葉
32A	那珂郡那珂町森戸遺跡	平底坏・甗(棒状把手・蒸気孔1+4or5・土師器模倣)	70号住居跡	II期/5世紀中葉
32B	那珂郡那珂町森戸遺跡	長頸壺(土師器模倣)	111号住居跡	II期/5世紀中葉
33	那珂郡東海村権現山古墳	円筒埴輪(格子叩き)	前方後円墳(90m級)	5世紀中葉
34	栃木県下都賀郡岩舟町赤羽遺跡	丸底碗(土師器模倣)	29号住居跡	I-1期/5世紀前葉
35	栃木市白山台遺跡	平底甗(陶質土器)	住居跡?	5世紀前半
36	河内郡南河内町二ノ谷遺跡	高坏蓋(陶質系土器)	D5-2号住居跡	I-2/5世紀前葉
37A	河内郡上三川町殿山遺跡	平底甗(陶質系土器)	KT-121号住居跡	I-2/5世紀前葉
37B	河内郡上三川町殿山遺跡	把手付蓋(土師器・ミニチュア)	KT-28号住居跡	I-1期/5世紀前葉
38A	河内郡高根沢町砂部遺跡	把手付無蓋高坏(陶質系須恵器)	SI-157号住居跡	II期/5世紀中葉
38B	河内郡高根沢町砂部遺跡	平底鉢(土師器模倣)	SI-434	II-2期/5世紀中葉
39	福島県白河郡表郷村三森遺跡	小型平底碗(陶質土器)	4号住居跡・51A土壌	I-2/5世紀前葉
40	白河郡玉川村辰巳城遺跡	把手付小型短頸壺(陶質系土器)	17号住居跡	III期/5世紀後葉
41	郡山市南山田遺跡	把手付小型短頸壺(陶質系土器)	1号墳周溝	I-2/5世紀前葉
42	伊達郡国見町下入ノ内遺跡	平底坏・蓋(土師器模倣)	祭祀跡?	I-2/5世紀前葉
43	いわき市竜門寺遺跡	平底碗・平底鉢(土師器模倣)	4号住居跡	I-2/5世紀前葉
44	双葉郡浪江町鹿屋敷遺跡	平底鉢(土師器模倣)	2号住居跡	I-2/5世紀前葉

*陶質系土器は揺籃期の須恵器を含む

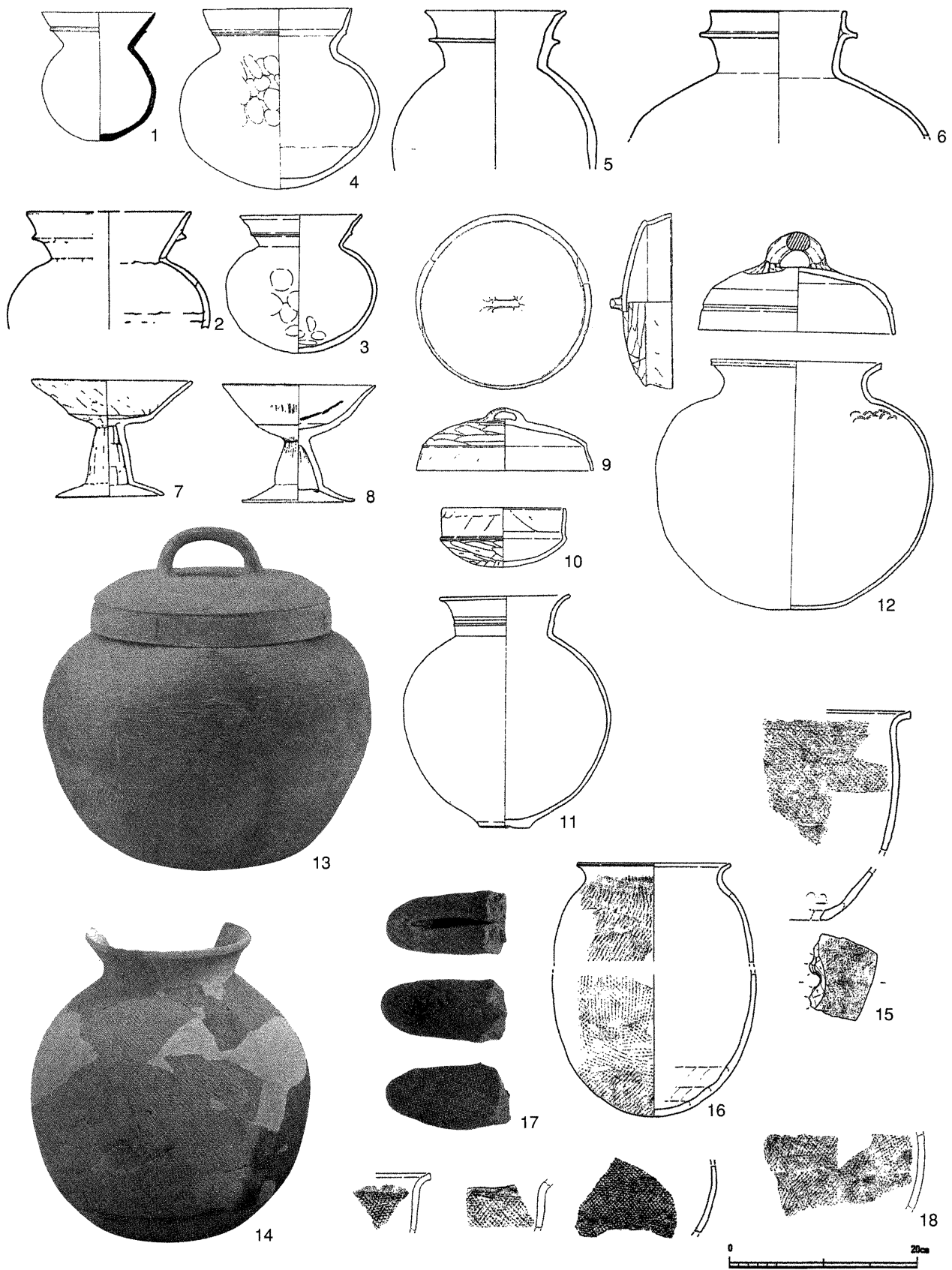


第1図 関東・南東北の古墳時代中期主要韓半島系土器出土遺跡



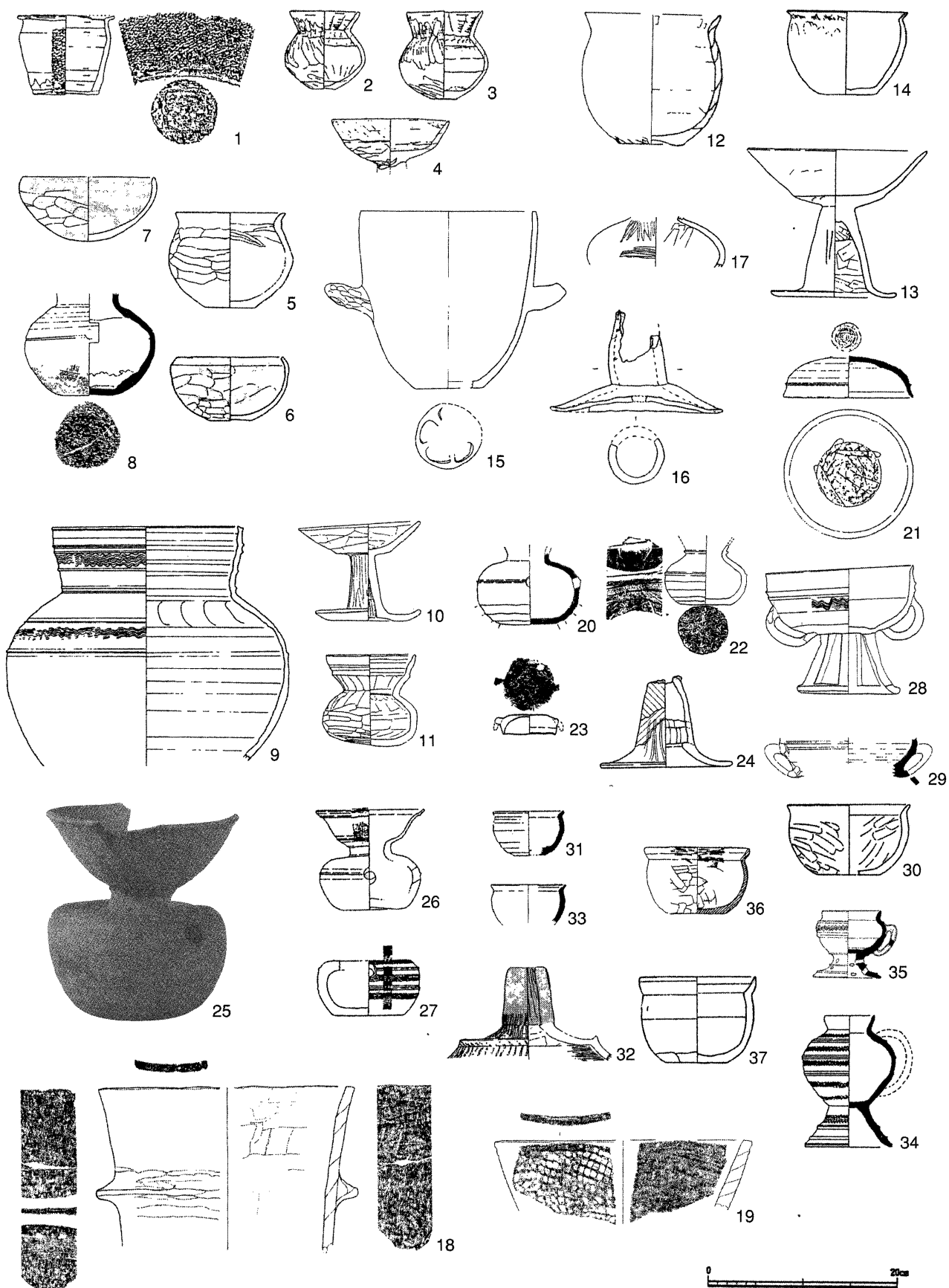
1・2 空沢遺跡35号墳 3～5：荒砥北三木堂遺跡2区43号住居跡 6：柳久保遺跡46号住居跡 7・8：熊野堂遺跡4-2号住居跡
 9～11：温井遺跡35号住居跡 12：後張C遺跡193号住居跡 13：後張遺跡12号住居跡 14：延享割遺跡20号住居跡 15～17：延享割
 遺跡23号住居跡 18・19平塚遺跡谷部東側 20：古川端遺跡 21：武良内遺跡 22・23：諏訪遺跡 24：金鑽神社古墳 25：生野山古
 墳 26：公卿塚古墳 27：白銀殿ノ前遺跡 28～31：伊興遺跡 32～33：仏向町古墳周溝

第2図 関東地域の韓半島系土器 (1)



1：和泉遺跡 2・7：城の腰遺跡114号住居跡 3：慶尚南道金海市金海徳亭遺跡12号墓 4：慶尚南道金海郡禮安里古墳群 5・8：法蓮寺山遺跡5号住居跡 6：全羅南道扶安郡扶安竹幕洞祭祀遺蹟中心部 9～10：城北遺跡118号住居跡 11：森戸遺跡111号住居跡 12：慶尚南道峽川郡玉田古墳群M3号號古墳 13：全羅南道羅州郡新村里第9號墳乙甕棺墓 14：下芝五反田遺跡 15～18：劍崎長瀨西遺跡

第3図 関東地域の韓半島系土器(2)



1～4：大森第2遺跡68号住居跡 5～7：戸張作遺跡117号住居跡 8・9：草刈六之台遺跡806号住居跡 10・11：草刈六之台遺跡310号住居跡 12・13：平台遺跡32号住居跡 14：永国遺跡13号住居跡 15～17：森戸遺跡70号住居跡 18・19：権現山古墳 20：白山台遺跡 21：二ノ谷遺跡2号住居跡 22：殿山遺跡KT-121号住居跡 23・24：殿山遺跡KT-65号住居跡 25：金羅南道靈岩郡内洞里2號墳墓甕棺墓 26：同靈岩郡萬樹里4號墳1号土壙木槨墓 27：同靈岩郡萬樹里2号墳1号甕棺墓 28：殿山遺跡KT-28号住居跡 29：砂部遺跡SI-157号住居跡 30：砂部遺跡SI-434号住居跡 31・32：三森遺跡4号住居跡 33：三森遺跡51A土壙 34：辰巳城遺跡17号住居跡 35：南山田遺跡1号墳周溝 36：龍門寺遺跡4号住居跡 37：鹿屋敷遺跡2号住居跡

第4図 関東地域の韓半島系土器 (3)

研究紀要 第20号

2005

平成17年7月22日 印刷

平成17年7月29日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷 株式会社太陽美術